ISSN0289-0917

龍谷紀要

第45巻　第１号

2023年10月

上方落語に見られる侍言葉の社会語用論的分析 …… 角　岡　賢　一（１）

The Lyke Wake Dirge:
Hosen and Shun …… ロザーティ・サイモン（21）

森鷗外『知恵袋』と Adolph von Knigge
„Über den Umgang mit Menschen“ をめぐって …… 國　重　　裕（29）

リンガフランカとしての英語によるオンライン異文化交流学習の授業
におけるクリティカルシンキング育成
――リフレクション・ジャーナルに焦点を当てて ――
…… ホワイト ショーン・アラン（39）

語源でみる接尾辞の語彙化 …… 姫　田　慎　也（57）

龍谷大学

RYUKOKU KIYO

THE RYUKOKU JOURNAL
OF
HUMANITIES AND SCIENCES

Vol.45 No.1 October, 2023

CONTENTS

A Socio-pragamatic Study of the Samurai Utterances
in the Kamigata Rakugo Stories ····· KADOOKA Ken-Ichi (1)

The Lyke Wake Dirge:
Hosen and Shun ····· Simon ROSATI (21)

Comparaison de "Chiebukuro" de MORI Ogai
et "Über den Umgang mit Menschen" d'Adolph von Knigge
····· KUNISHIGE Yutaka (29)

Developing Critical Thinking Skills in Virtual Exchange:
Reflective Journal Writing for University English
as a Lingua Franca Learners ····· Sean A. WHITE (39)

Lexicalization of Suffixes in Terms of Etymology ····· HIMEDA Shinya (57)

Published by
Ryukoku University
Kyoto, Japan

上方落語に見られる
侍言葉の社会語用論的分析

角　岡　賢　一

▶キーワード

上方落語、待遇表現、
侍言葉、人称代名詞

▼要　旨

Rakugo stories are a form of popular entertainment in modern Japan, with an origin dating back to about 400 years ago Kobanashi (literally *small stories*). In those days, samurais belonged to the governing class, and their way of speaking was different from those of the other classes of farmers, merchants and craftsmen. In this paper, the dialogues between the samurais and the other class members will be analyzed from the viewpoints of socio-pragmatics, mainly focusing on the usages of personal pronouns. The styles of the conversations MUST be differentiated according to interpersonal relationships of the social classes.

第一節　はじめに

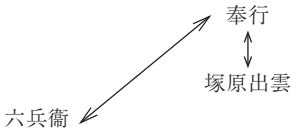
天下の台所、商都の大坂は商人の街であって、侍は少なかった。堂島の蔵屋敷には日本中の米や品が集まり、それを司る侍も居たのであるが、半分は商人のような役回りであった。そのような事情もあって、上方噺には侍の出てくる場面は少ない。専ら、公事立て（訴訟）でお奉行さんが裁くという政談ものが多い。大坂には西町と東町という奉行所が置かれ、一月ごとに交替していた。奉行は、今で言えば府知事、地方裁判所長官、府警本部長を兼任するような立場であり、絶大な権力を持っていた。庶民にとっては、些細な揉め事を公事立てすることもあったが、そういう場合は与力が片付けてしまう。お奉行自らがお白洲で裁く、というのは余程の例外であったという。それはそうであろう、日常の細々とした公事立てを一人の奉行が裁ききれるものではない。そこは、噺として奉行が裁くという見せ場を作る意味があるのであろう。

本稿では侍言葉という見出しを立てたが、大半は政談ものである。つまり、お裁きの場でお奉行さんが快刀乱麻を断つように、勧善懲悪を実現するのである。お裁きに至るまでは、善人が不合理な苦労を重ねて、聴き手の同情を誘うような筋立てが必要なのである。例えば噺『帯久』（米朝全集第一巻）で善良な和泉屋与平右衛さんが、大店の呉服店であったのが火事に遭い、自身も病で十年も寝込むというように辛酸を嘗める。嘗ての商売敵であった帯屋久七に助けを求めるも冷たくあしらわれ、恨みを募らせる。思いあまって帯久宅に火付けをしようと試みて捕えられ、お裁きの場に引っ張り出される。お裁きの場では、帯久の不審さに疑念を持った奉行が最後に与平右衛さんを救う裁決を下す。ご都合主義的ではあるが、奉行所というのは、庶民にとっては何かあった折に最後に頼るべき存在であったろうか。

本稿で論じる侍言葉というのは、拙著『上方落語にみられる待遇表現』で尊大語と括った範疇と大きく重なる。寧ろ、侍言葉即ち尊大語と割り切る方が実態に近いと言えるかも知れない。侍言葉以外では例えば、店で当主が丁稚を「そち」と呼ぶのも尊大語と分析したのであるが、そういう状況や使用例はごく少ない。侍階級は、目上に対しては尊敬語、同等の者に対しては「ご同役」というような丁寧語で遇するが、下役や町人など目下の者には尊大語を用いる。

第二節　『鹿政談』

この噺は、奈良が舞台となっている。三条横町の豆腐屋六兵衛さんが朝早くから石臼で豆を挽いていると、大きな犬のような動物が店先に置いてあったきらず（雪花菜（おから））をむしゃむしゃと食べている。「しゃい、しゃい」と追うたものの動かないので割り木を投げつけると、当たり所が悪く、そこに倒れ込んでしまった。近寄ってみると、これが犬ではあらず鹿であり、しかも落命していた。まだ暗い内で、機転を利かせて骸をどこかに運び去るというような手段もあるのに、正直者の六兵衛さんがおろおろしている間に夜が明けてくる。明るくなると町内の人目にも止まり、奉行所に届け出をせずには居られない。奈良奉行は曲淵甲斐守、お白洲には目代屋敷鹿の守り役である塚原出雲と興福寺の番僧も控えている。噺『鹿政談』は、六兵衛さんと奉行、塚原出雲三人の会話によって成り立っているが、その人間関係を図示すると次のようになる。



図一　『鹿政談』の人物相関

お白洲の場面までは前置きのようなものであり、お裁きで奉行が六兵衛さんを取り調べる段が中心である。人情味溢れる奉行は、当初から六兵衛さんを無罪放免にするつもりであったが、塚原出雲はそれに異を唱える。こうして人物関係を図示してみても、至って簡潔な構造であることが見て取れる。奉行が六兵衛さんに尋問するのと、塚原出雲が無罪放免しようとする奉行に異を唱え、奉行がそれを封じ込める、とそれだけの問答で成り立っているのである。

まず、奉行が直々に次のように六兵衛さんに尋問する。

(1)　**奉行**「豆腐屋六兵衛、面を上げい。その方何歳に相なるな」
　六　「四十二でございます」
　奉　「そちゃ生まれは何処（いづく）であるな」
　六　「わたしは奈良三条横町で、、、」
　奉　「あぁ待て、三条横町はその方が住まいを致すところ。奉行、生まれ在所を訊いておる。落ち着いて答えねばならん。生まれは何処であるか」
　六　「わたしは奈良三条横町で、、、」
　奉　「控えい。お白州へ出れば上のご威光に打たれて、うろたえた返答をなす者がある、落ち着かねばならんぞ。そちゃ奈良の生まれではあるまい。生まれ在所を真っ直ぐに申し述べよ」

曲淵甲斐守は自称を「奉行」とし、六兵衛に対しては「その方、そち」と呼びかけている。「奉行」というように役職を自称とするのは、尊大表現と受け止められる。「何歳に相なるな」の「相なる」は、接頭辞的用法の「相」によって尊大表現的意味合いが加わっている。「控えい」と六兵衛さんを制しているのも、尊大表現的な一方的な命令である。この場面は、奉行が六兵衛さんの生まれ在所を奈良以外であると答えさせ、鹿殺しは死罪になることを知らなかったというように誘導して無罪放免にしようと試みたのである。しかし根が正直である六兵衛はそれに気づいておりながら、「奈良の生まれではありません」と虚偽を述べることができない性分である。ここで奉行は、骸は鹿ではなく犬であるというように無罪放免の手立てを変えた。

(2)　町役連中も犬と見たか。奉行も犬と見た。与力どもも犬と見た。いやなに、塚原出雲、その方もお役目大事と心得たればこそ、すみやかに届け出でたるものであろう故、粗忽の儀は咎め立ては致さんが、これは毛並みの鹿に良く似た犬である。犬を殺したる者に咎はない。書類は取り下げてよろしかろう。

奈良奉行と鹿の守り役である塚原出雲という上下関係であるから、立場の違いは明らかである。言葉遣いとしては、町人である豆腐屋六兵衛さんと下役である塚原出雲に対する場合で大きな違いはないと言えよう。奉行は両人に対して「その方」と呼びかけている。「粗忽の儀は咎め立ては致さん」というのも武張った言葉遣いである。また、「いやなに」というのは勿体ぶった感動詞である。

しかし塚原出雲も簡単には引き下がらない。鹿と犬では、大きさも自ずから異なる。奉行の「鹿にしては角がない」という指摘に対して「それは落とし角、袋角というものであり、季節によって角が生えていないこともございます」と反論するも、三千石の餌料を流用している科を仄めかされ、引き下がざるを得ないような窮地に追い込まれるのである。

(3)　黙れ。奈良の奉行を務むる身が、鹿の落とし角、袋角を存知おらぬと思いおるか。

俳諧の講釈聞きとうない。これをその方あくまでも鹿と言い張るならば、尋ねんければならぬことがある。鹿には年々、上より三千石の餌料が下しおかれおる。しかるに、その餌料のうちを金子に替え、奈良の町人どもに高利をもって貸し付け、役人の権柄にて厳しく取り立つる故、難渋いたしおる者あまたあること、奉行の耳にも入りおるぞ。

三百頭内外の鹿に、三千石の餌料ならば、鹿の腹は満ち満ちておらんければ相ならん。それを碌様(ろくざま)餌も与えぬまま、鹿はひもじさに耐えかね町中をうろつき回り、畜生の悲しさとて、豆腐屋においてきらずなんぞを盗み食ろうに相違あるまい。

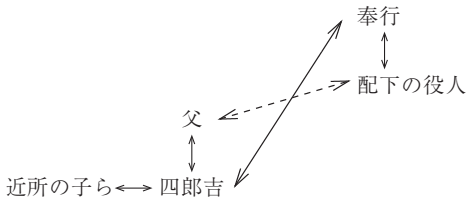
その方、これをあくまで鹿と言い張るならば、犬か鹿かはさて置き、餌料横領の方より吟味致そうか、どうじゃ。たとえ神鹿たればとて、他人の物を盗み食ろうにおいては、これ俗類にして神慮に適わん。打ち殺しても苦しうないと奉行心得る。これは犬か鹿か、返答致せ。

この段、鹿か犬かの吟味はさておいて餌料三千石流用の科から問い質そうかというのは如何にも強引であるが、塚原出雲にすれば身に覚えがあるからであろう、ぐうの音も出ない。このように落語や講談におけるお裁きものは、典型的な勧善懲悪の筋書きを辿るのである。この裁きにおいても、最後は豆腐屋六兵衛さんは無罪放免となる。ここでは全般的に、奉行という権力を背にして下役を責め立てるが如き畳み掛ける口調で終始している。その言葉遣いは、町人である豆腐屋六兵衛に対する口調と同等、若しくは職権濫用の疑いありということで下役に対してはより苛酷である。権柄を笠に着て高利貸しの真似事などする段を咎め立てするのは、居丈高と言っても良い調子である。「吟味を致す」の「致す」は「する」の意で、本来は謙譲語である。ここでは、奉行が塚原出雲を取り調べようかというのであるから、尊大表現と見做してよかろう。「返答致せ」では、命令調になっている。「餌料が下しおかれる、奉行の耳にも入りおるぞ」における「おる」は、卑尊度においては中立に近いながらも奉行を権威付けするような響きを有する。「金子、禄様、相違あるまい、俗類、神慮」等は字音語あるいは文語めいた口調で武張った響きがする。一話全体として、お裁きものとしては比較的に短いながら噺の運びとして、勧善懲悪という基本線の上に起承転結が整えられていると言えよう。

第三節　『佐々木裁き』

佐々木信濃守顕発(あきのぶ)公は実在の人物で、幕末の嘉永五年から安政四年までの約五年間に及んで大坂東町奉行を勤め、後に江戸北町奉行に転じた（『圓生集』）。幕末で世情は不穏、役人には賄が横行していたので、奉行が粗末な服に着替えて街を視察していたと噺では語られる。その折、近所の子らが奉行事で遊んでいる場に遭遇する。奉行役になった子の跡を家来に追けさせ、夕刻に奉行所に出頭するように命ずる。これは遊んでいた子らを咎めようという意図ではなく、世情を知るために事情を訊くというような意味合いがあったと思われる。政談ものではあるが、四郎吉に何かの科があるのではない。お白洲での吟味は以下のように展開するのであるが、どういうものか上方噺では西の御番所が好まれて史実とは異なる（髙島幸次氏『古典落語の史層を掘る』、『第三巻』）。ここでこの噺に登場する人物の人間関係を図示すると、次のよ

うになる。



図二　『佐々木裁き』における人間関係

四郎吉の父は、高田屋という屋号で桶職人である。噺の本筋は信濃守が四郎吉の頓知を試そうというので、次から次へと難問を繰り出す。四郎吉は、どのような問いにも当意即妙に返していく。米朝師の解説には「この噺には、こましゃくれた子供のいやらしさがかなり強くありますので、その点に注意を要します」と評されている。確かに、当節役人の心得と尋ねられると、天保銭を紙縒りで起き上がり小法師に括り付け、ごとっと横になる様子を「とかく金のあるほうへ傾くわ」と皮肉を言う。大人顔負けで、役人への批判が過ぎていると父らは冷や冷やものである。

まずは、四郎吉を始めとする子らが奉行事で遊んでいる場面の描写がある。そこに信濃守当人が通りかかって、四郎吉を奉行所に呼んで吟味に及んだのである。『米朝全集』第三巻では、そこで四郎吉が「両名の者、面を上げい、余は西町奉行佐々木信濃守じゃ」と宣したことになっている。子供ながら、奉行の自称を「余」と称している点が興味深い。

奉行事の場面では、次のような人称代名詞が見られる。子らの遊びでは、自称詞として「わて」「わい」を使用している。対称詞では、四郎吉に向かい「あんた、今日からずーっとお奉行さんしなはれ」と提案している。四郎吉はあちこちに寄り道をしながら家に帰ってくる。尾行してきたのが、奉行配下の三蔵である。

(4)　三　「ああ、許せ」
　　父　「へい、お越しやす」
　　三　「身共は西町奉行、佐々木信濃守の家来・・・・・・」(中略)
　　三　「高田屋綱五郎、うむ、桶職じゃな。これはそのほうの倅か、名はなんと申す」
　　父　「四郎吉と申します」
　　三　「四郎吉、何歳に相成る」
　　父　「四十二で」
　　三　「馬鹿、子供の齢じゃ」
　　父　「十三でございます」
　　三　「十三歳・・・・・・そのほう同道いたして町役付き添いの上、即刻西の御番所まで出でまするよう。町役には身共から伝えておく。よいな」

三蔵は侍らしく、自称詞は「身共」、綱五郎に対しては「そのほう」と呼んでいる。典型的に、侍が町人に対しての尊大語になっている。この直前に、四郎吉は帰る早々奉行遊びで佐々

木信濃守に扮して評判を取ったと自慢気に報告をしていたのであった。綱五郎は、奉行のご家来が家に来たというだけでも何事かと訝しんだであろうが、その上に奉行所に呼び出されたとなると驚天動地の思いであったろう。そこで町役が集まって談判をする。その場面では火の番をする番太に「おまはんな、番太ちゅうたら火の番さえ気ィつけてたらええんと違うがな」と諭している。番太は「あきまへんね、わたいらの言うこと、なんにも聞きよれしまへんわ」と反論する。補助動詞の「よる」が使われている。「よる」は卑尊度で中立から軽い卑罵の方に触れる。番太は同じ語りの中で「わし」「わて」という自称詞も用いている。町役は四郎吉に対しては、「お前また、おかしなことして遊んでたんと違うか」と問う。

人称代名詞以外では、補助動詞の例が多い。父親が四郎吉に小言を垂れる場面で、「寺屋からじきに遊びに行きやがって、ええ」、「またこの辺の子供、ろくな遊びさらさへんねん」、「こないだもわしの見てる前、縄でくくられて、尻どつかれて歩いてけつかんねん」という具合に長々と叱る。「やがる、さらす、けつかる」と、いずれも卑罵語の補助動詞で野卑度は同程度である。

町役は御番所に行く機会も多いので、大抵の案件は与力が捌いてしまうということを承知している。ところがこの日は、長い間呼び出しがかからず、奉行自らがお白洲でのお裁きというので、何事かと身構えている。

(5) **奉行**　「松屋表町、高田屋綱五郎、倅四郎吉、町役一同出とおるの」
町役一同「お畏れながら、これに控えております」
奉行　「うむ、四郎吉、面を上げい。四郎吉、面を上げんか」
町役　「おい、顔上げんねやがな」
四郎吉　「あっ、顔ですか。へい、こんな顔でおます」
奉行　「余の顔に見覚えはないかな」
四　「あぁーっ、最前住友の浜に立ってはったお侍」
奉行　「よく思い出してくれたな。あの節は吟味の邪魔をして済まなんだな」
四　「いえ、どういたしまして。そやけどまぁ、これからもあるこっちゃさかい、以後は気ぃ付けてもろわな、、、」
奉行　「上多用の砌、手数をかくる奴が多くて叶わんのう」
四　「へい、もう、ご互いに事務多忙で、、、」
町役　「も、そんなこと一々言うな」

奉行の佐々木信濃守は、四郎吉に対して年相応に柔軟な言葉遣いを心がけている様子が窺える。例えば「余の顔に見覚えはないかな、あの節は吟味の邪魔をして済まなんだな」というように、親しみを込めているような語り口である。「余」という自称詞と、「見覚えはないかな」という問いかけは釣り合いが取れないようにも響く。対して四郎吉は「以後は気ぃ付けてもらわな」というように遊び仲間にでも話しかけるような調子である。町役が度々「そんなこと一々言うな」と窘めねばならぬ程、物怖じしていないように描かれている。奉行の本心は、四郎吉が普段からどのようなことを考えているのか問い質すためであって、奉行事で遊んでいたのを咎める意図などなかったのである。本題へは、次のように進んでいく。

(6) **奉**　「しからば、そのほう、余の尋ねること、なんなりと答えるか」
四　「へえ、そら知ってるこっちゃったら何でもお返事しますけれども・・・・・・あんさんそんな高いとこに座ってなはんねん。わて下でおじぎしてまんねん、位負けがしまんがな。わたいもそこにへ座らしてもろたら何でも答えま」
奉　「よい、許す。これへ参れ」
四　「ごめんやす」
父　「ちょっ、ちょっ、ちょっと・・・・・・ちょっと、倅つかまえとおくなはれ。気が違うて、お奉行さんのそばへ行きよりますがな」
町役「お許しが出たさかい、ええのや」
父　「そうかて」
役人「控えい」

このように、十三歳児らしい大胆な稚気を発揮することもあれば、大人顔負けの皮肉を発したりもする。稚気は、奉行を「あんさん」呼ばわりすることにも見て取れる。奉行の自称詞は相変わらず「余」で、四郎吉へは「そのほう」と呼ぶ。いずれも尊大語である。「これへ参れ」というのも尊大語である。綱五郎は、四郎吉の言うことや振る舞いに気が気でない。

この後、奉行は四郎吉の頓知を試す問いを次々に投げかける。曰く、夜空の星を見上げて「そのほう、あの星の数を存じておるかのう」、また三宝に饅頭を山盛り持って来させて「四郎吉、そのほうにとらすぞ。遠慮なく食すがよい」と勧める。「とらす」という本動詞も尊大語になっている。四郎吉は、家では母親は小言をくれる一方であるが、父親が饅頭をくれる、というような話をして、奉行に「小言をくれる母親と、饅頭をくれる父親（てて）と、そちゃいずれが好きじゃ」と問われる。ここでは、饅頭を二つに割ってみせ、「お奉行さん、この二つに割ったおまん、どっちがおいしいと思いなはる」と逆に問う。これは、小言をくれる母親と、饅頭をくれる父親のどちらも有り難い、という譬喩というのである。確かに、十三歳児の発想としては老成しすぎで、一人前の大人に対する警句とも言うべき水準であろう。続いては、上段でも紹介した「当世与力の心得は」という問いに対して、起き上がり小法師に天保銭一枚を括り付けた実演であった。

最後は、奉行が衝立に描かれている仙人について「あの仙人、何やらおもしろそうに話をしておるが、あれは何をしゃべっておるのか、そのほう聞いてまいれ」という命令である。四郎吉の返答は「佐々木信濃守ちゅう奴はあほやな言うてましたで」という驚くべきものであった。「絵に描いたもんがもの言うはずがないのを聞いてこいちゅうのは、だいぶにあほやでえ言うてました」というのも、道理である。一本取られた奉行は、「かかる小児は導きようであっぱれ世の役に立つ者にもなる。が、またひとつ間違えば、恐るべき人間になるやもしれん。十五になるまでそのほうの手もとに置け。十五になれば身共が引き取って養育してとらす」と裁断するのであった。

ここで、この噺に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表一　『佐々木裁き』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
四郎吉	わたい　わて　　わい
子ら	わて
三蔵	身共
奉行	余

対称詞

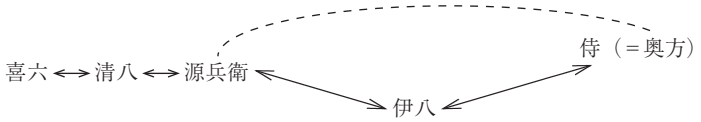
話し手	対称詞　（相手）
四郎吉	あんさん（奉行）
子ら	あんた（四郎吉）　お前（四郎吉）
三蔵	そのほう（父）
奉行	そのほう、そち（四郎吉）

関与している人間関係は、比較的限定的である。主な場面は奉行が四郎吉に問いかけるお白洲の場であるので、人称代名詞も「余、そのほう、そち」というように尊大語に傾く。四郎吉が奉行を指して「あんさん」と呼んでいるのは、ある程度の敬意を込めているものの、大人ほどの敬語運用ではない。四郎吉の自称詞は「わたい、わて、わい」というように幅がある。父親に話すには「このごろ東のお奉行さん、ちょっと評判悪い。そやさかい、わい、西のお奉行さんでやったんや」と普段の調子である。奉行の前では「わたい」と、多少は改まっている。全体として、お裁きではないものの、奉行直々にお取り調べというので非日常的な状況である。それが、このように固定された言語使用にも反映されていると言える。

第四節　『宿屋仇』

噺『宿屋仇』（第七巻）は、伝統的な分類では旅ネタである。兵庫の若い者と自称する三人連れが、お伊勢詣りの帰り道、最終日に日本橋で宿を取る。精進落としも兼ねて芸妓遊びで大騒ぎを始めたが、隣部屋の侍が「静かにせい」と申し寄越すので、思い通りにならない。仕方がなく床を取って相撲談義をしているうちに、布団の上で取り組みになってしまう。それでも寝付けないので色事談義に至るが、ひそひそ話が大騒ぎに転じる。都合三度、侍は静かにするようにと伊八を隣部屋に差し向けるのであるが、その一部始終を脚色した噺である。

ここで、三人組、伊八と侍の人間関係を図示しておく。源兵衛の話中で、高槻藩士小柳彦九郎の奥方と交わす会話という仮構があるが、これは後に源兵衛自身が白状するように、三十石舟の中で小耳に挟んだ挿話なのである。



図三

侍は、身分の上で上位に位置し、それは尊大語という言語使用に現れる。三人組は、泊まり客という立場で伊八よりは上位に置く。三人組と侍が直接に言葉を交わすことはない。「静かにせい」というのは、伊八を介して伝えられるのである。

次の場面は、明石藩の万事世話九郎と名乗る侍が大坂日本橋の紀州屋源助という宿で投宿する際の会話である。

(7) 万 「ああ、許せよ」
伊 「へぇ、お越しやす」
万 「ああ、紀州屋源助とはその方宅であるか」
伊 「へぇ、手前どもが紀州屋でございます」
万 「その方が主の源助であるか」
伊 「いえいえ、手前は当家の若いもんでございます」
（中略）
万 「おう、伊八であるか。間違いである、許せ。いやなに伊八、待てまて、、、些少ながらこれを遣わすぞ」
伊 「これはこれは、帳場へのお茶代でございますか」
万 「いやいや茶代ではない。特別をもってその方に遣わすのじゃ」
伊 「わたくしへのお心付けでございますかいな、こないにたくさんにぎょうさん、ありがとうさんにござります」
万 「こりゃこりゃ、そのようにひねくり回さいでもよい、中身は銀一朱より入っておらん」
伊 「ありがとうさんにござります」
万 「いやなに伊八、その方に特別をもって銀一朱遣わすは余の儀で無いぞ。身共は明石の藩中にて万事世話九郎と申す者じゃが、夜前は泉州岸和田、岡部美濃守殿ご城下、浪花屋といえる間狭な宿に泊まり合わせしところ、雑魚も藻草*1 も一つに寝かしおって、巡礼が詠歌を唱えるやら、六部が経を読むやら、相撲取りが歯軋りを噛むやら、駆け落ち者がいちゃいちゃ申すやら、夜通し身共を一目も寝かしおらなんだ。今宵は間狭にても良い、静かな部屋へ案内してくれい」

ここでは、明石藩の万事世話九郎と名乗る侍は自称を「身共」とし、宿の伊八に対して「その方」と呼びかけている。まずは宿に立ち入る段から「許せよ」と高飛車である。伊八は侍に向かって「手前、わたくし」と自称している。対して侍からは「その方」と呼びかけている。

*1 藻も艸も草のこと、草々、種々雑多なものという意。

このように身分制の下では、人称代名詞一つ採っても厳格な上下関係によって言語表現が規制されていたと言える。また終助詞として「じゃ」というのが複数回附されているが、これも尊大語として特徴の一つに挙げられよう。人称代名詞以外では、「静かな部屋をあてがってもらいたい」という意図で伊八に渡した銀一朱（現在の三千円程度に相当）を「遣わす」という動詞で具現している。

侍の万事世話九郎に続いてこの紀州屋源助に投宿を求めてきたのが、「兵庫の若い衆」と自称する三人連れである。侍言葉とは打って変わり、摂津でも播磨に近いという土地柄もあるのか、船場言葉と異なるという印象を持たせるように演者が演出意図として意識しているようである。三人のうちでは源兵衛と称する男が年長格のようであり、残る二人である喜六と清八をあれこれと指図するような人間関係と設定されている。まずは宿屋を探す段階から三人が賑やかにあれこれ言い囃しながら歩いているのを、伊八が訝りながらも客引きをしている。

(8) **伊**「やっかましいなぁ、、、あんさん方、どうぞお泊まりを」
源「おう、若い衆さんえらいすまん、今も言うての通りやで、紀州屋源助ちゅうとこ泊まったってくれちゅうてな指し宿されてんねんで、おんなじことならそこに泊まったってやりたいやろ、悪う思わんといてや」
伊「ありがとうさんでございまして、手前どもがその紀州屋でございます」
源「なんじゃい、ワレとこかい。おーい、分かった分かった、こいつや」
喜「しめた、捕まえたら逃がすな。棒でどつけ」
伊「盗人捕まえたように言うてなはるなぁ、、、」

まずもって伊八が、侍相手ではない三人連れの客に対して「あんさん方」という呼びかけ方をしている点に注目したい。侍に対しては、決してこのような声かけは許されるものではない。往時は相手の身分は、着衣のような身形や帯刀によって自ずと見分けられたものであろう。ここにおいて、身分が違えばこのように第一声の人称から変わるという観察がなされる。「あんさん」という二人称代名詞は、「あなたさま」から変化したという経緯は疑う余地がなかろう。「あなたさま」の五音節五拍が、「あんさん」では二音節四拍にまで縮約されている。その途中経過は想像し難い。それは「さま」が「さん」に変化するのは比較的容易に仮定できるのに対して、「あなた」が「あん」に到るには途中で「あんた」という段階を経て「た」が脱落して「あんさん」というように考えざるを得ない。つまり「あなたさま」→「あんたさま」→「あんさん」という経過を仮定することは音韻的に合理的であろうが、恐らく途中の「あんたさま」は文献で確認することは不可能であろう。『大阪ことば事典』（33、34 頁）では見出し語「あんさん」に「主として商人用語で、一般にはアンタハンを用いた。」と説明を加えている。見出し語「あんたはん」では、「ふつう、目上の人に対して用いる」としている。

そして客である三人連れからは、客引きの伊八に対して「われ」という二人称代名詞が用いられている。これは、京阪方言においてもかなり荒っぽい尺度を示す二人称代名詞である。万事世話九郎の遣う侍言葉とは対照的な卑罵表現である。「なんじゃい」という感動詞的な発話における助詞「じゃい」もまた随分と乱暴な物言いである。少なくとも京では耳にしない語尾である。

源兵衛以下三人連れは明石藩士万事世話九郎の隣に投宿するが、芸者を揚げてドンチャン騒ぎを始めた途端に伊八を通して万事世話九郎に窘められ、騒ぎを切り上げる。床を取って、寝付くまで話し込む内に、相撲談義になる。それが昂じて布団の上で相撲を取り始めるという始末になり、またしても伊八に止められる。「色事の話なら声を潜める」とばかりに源兵衛が語り始める。高槻藩士の小柳彦九郎という重役宅に小間物の行商に廻っていた折り、奥方に次のように呼び止められたという。ここでは源兵衛が自分が体験した一件として語っているのであるが、実際は三十石舟の中で喋っていたことを再現しているのに過ぎない。つまり、二重三重の意味で架空の会話なのである。

(9) **奥**「これは良いところへ小間物屋、今日は旦那殿は留守なり、女中どもは皆宿下がり、わらわ一人が徒然の折、ちとそなたに誂えのしたいものがある。どうぞこちらへ上がってたも」
源「さようならば、ごめんなされてくださりませ」
奥「小間物屋、そなたささは食べぬかえ」
源「たけのこなら食べますけど、笹は食べまへん」(中略)
奥「小間物屋、そなたが初めて当家へ見えし折り、女中どもの噂話に、ふと垣間見たその姿、てもよい殿御と思い染め・・・・・・日ごとにつのるこの思い、どうぞこの恋かなえてたも」
源「なんということをおっしゃいます。あなた様と、私とは身分が違います。たとえにも申します。月とすっぽん、提灯に釣鐘、釣り合わぬは不縁のもとてなことを申します。こればっかりはお許しを」
奥「そんならこの恋どうでもかなわぬか」
源「何とぞお許しなされてくださりませ」

ここでは武士の奥方が町人である源兵衛と話しをしているという仮構なのであるが、奥方の語り口は真正であると仮定する。語用論的には、身分と共に性差も考慮に入れねばならない。奥方は自らを「わらわ」と称し、町人である源兵衛に対しては「そなた」という二人称代名詞を用いている。また座敷へ上がるのを促すのに「上がってたも」という丁寧な要請をしている。「ささ」は女房詞で酒の意である。源兵衛の言葉遣いは、身分差を意識して最大限とも言える敬度を表している。自称詞は「私」で対称詞は「あなた様」「ごめんなされてくださりませ、お許しくださりませ」と補助動詞「なさる」と「くださる」の併用などに、尊敬表現が見られる。これも、動詞や補助動詞を重ねる複式叙述である。源兵衛は女房と密通している現場を彦九郎の弟に見咎められ大刀で斬り付けられたところを逆に殺めてしまう。女房に「わらわを連れて逃げてたも」と請われて金子五十両を託されるや否や、この女房をもまたずばっと斬って逃げおおせたと語るのである。

三人は小声で話していたつもりでも、やがては喜六と清八が「源やんは色事師、色男は源やん」と大声で源兵衛を囃し立てる。またもや立腹して伊八を呼び出した侍は、次のように伊八に通告した。

(10)　隣りの部屋に泊まりおる喜六、清八、源兵衛。中なる源兵衛といえる奴。妻、弟の仇に紛れなし。今、おのが口から斯く斯く然々と白状しおった。天網恢々疎にして漏らさず、今宵踏み込んで仇を討とうか。先方より仇と名乗って討たれに来るか。二つに一つの返答をば、訊いてまいれ。

これは仇（憎い相手）である場合、こういう言語的扱いになるという見本のようなものと言える。源兵衛を指して「おのが口から白状しおった」と言っている。三人称代名詞としては「己」が主格であり、属格の「己が」が「おのが」と変化したものであろう。助動詞の「おる」も、卑罵的な意味合いを含んでいる。「よる」という語形の方がより口語的である。『日本国語大辞典』の説明では「よる」は「動詞の連用形に付いて、動作主を軽く卑しめる意を表し、また、その動作が進行中であることを表す」とある（第十三巻）。最後に命令として「返答を訊いてまいれ」としている。「まいる」は『広辞苑』（第六版）によると、「「する」を重々しい口調でいうのに使う」とされている（2626 頁）。ここでの用法は、侍である自分を伊八よりも上の立場に置いた尊大表現と考える。

源兵衛はまさかこのような場所で小柳彦九郎その人と隣り合わせに宿を取ることになろうとは、とばかりに慌てて「三十石舟で他人が喋っていた話を、我が事のように言うたまでのこと、どうぞお許しを」と返答したが、侍はそんなことで納得しない。

(11)　左様であったか、しからば斯様いたそう。明朝正巳の刻、日本橋に於いて出会い仇といたそう。それなら当家に迷惑もかかるまい。喜六、清八の両名も、朋友のことであれば定めし助太刀致すであろうが、助太刀は幾何十人有っても苦しうないと伝えよ。また、助太刀するせんにかかわらず、ついでじゃ邪魔臭い、三人ともズバッといてしまおう。それまであの三名の命しかとその方に預け置くぞ、一人（いちにん）たりとも逃がしなば、家内中撫切りじゃ、左様心得い。

元は明石藩の万事世話九郎と名乗り、ここでは「それは世を忍ぶ仮の名、真は高槻藩士の小柳彦九郎」と名乗り直している。これは咄嗟の機転で、翌朝には自ら偽りであったことを告白するのである。これは隣室の三人を鎮め、自らが安眠するために考え出した方便であった。いずれの名を名乗っている場合でも、侍言葉は板に付いたものである。ここでの「心得い」にしても、上掲（10）の「訊いてまいれ」にしても、強い命令口調であり、立場的に尊大表現のように響いている。『広辞苑』の「重々しい口調」というのは、話し手の権威付けとして作用していると言える。

ここで、この噺に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表二　『宿屋仇』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
侍	身共
三人組	わし　わい　俺
奥方	わらわ
伊八	手前ども

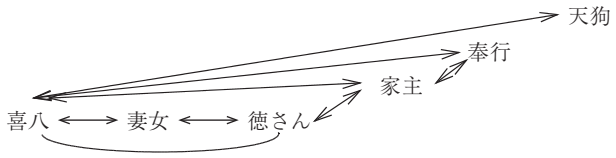
対称詞

話し手	対称詞　（相手）
侍	そのほう、そち（伊八）
三人組	あなた様（奥方）おまはん（伊八）お前（仲間内、伊八）われ（伊八）
奥方	そなた（源兵衛）
伊八	あんさん方（三人組）

架空の会話ではあるが、源兵衛が奥方と話をしている場面は、貴重である。武家の奥方が話をする場面というのは、この『宿屋仇』以外には見当たらないのである。自称詞の「わらわ」は『広辞苑』（第六版、3038 頁）によると「武家時代、女が自分のことをへりくだっていう語」という説明がある。謙譲語という位置付けである。源兵衛が奥方への対称詞に「あなた様」と言うのは、最上級の敬度である。宿を取る際に伊八に対して「われ」と呼んでいたのと対照的である。伊八は、言葉遣いが荒い三人組に対しても「手前ども、あんさん方」と泊まり客として遇している。

第五節　『天狗裁き』

本節で採り上げるのは、長屋で始まり、男が見ていたと周囲が信じる夢を巡る怪奇談である。喜八は夢など見ていないと言い張るのでお裁きの場に移り、やがては天狗が鞍馬の山奥まで男を連れ去る、という複雑な構造をしている。しかもサゲでは、一話は夢であったという種明かしがされ、廻りオチという構成になっている。奉行もこの奇妙な一件を裁くのであるが、その奉行が私利私欲に駆られて喜八を奉行所の松に吊すという暴挙に及んだところを、上空を飛翔していた天狗が鞍馬の山奥まで喜八を連れ去る、、、というような奇想天外な展開になっている。この噺では場面が切り替わる毎に、夢の中身を聞きたがる相手が妻女、隣家の徳さん、家主、奉行、天狗と移り変わっていくのが特徴である。まずはそれを図示してみる。



図四　『天狗裁き』の人物図

噺の運びとしては、喜八が見たと周囲の者が思い込んでいる夢の中身を聞きたがるという単純な筋なのであるが、それを繰り返す度に大事になっていく、最後は超人的存在として天狗まで持ち出すというのが特徴である。本図では、家主、奉行、天狗という相手が右肩上がりに配置されている点に、そのような特徴がよく表れている。上図は、その人物相関を幾何学的に示している。天狗も、超人的存在ではありながら、奉行と似たような言葉遣いになっている。

ではまず発端、妻夫間の会話である。通例では名前を呼ばれることがない主人公、ここでは「喜八」と呼ばれている。妻女はお咲さんという名前である。

(12)　**咲**「なんやむつかしい顔して何かぶつぶつ言うてるわ……、一体、どないな・・・・・・まあま、今度はまたニターッと笑ろて、どんな夢見てんねやろなぁ、この人。ちょっと、ちょっとあんた、起きなはれ」

八「あっ・・・・・・、あーあ、あ・・・・はあ、寝てたな」

咲「寝てたなやないがな。あんた今いったいどんな夢見てたん」（中略）

八「・・・・・・夢なんか見てえへん」

咲「見てえへんことあるかいな。むつかしい顔したり、にたっと笑うたり、なんやぶつぶつ言うたり、かなり面白そうな夢やったやないの。どんな夢見てたん」

八「・・・・・・わしゃ何ぼ考えても、夢なんか見た覚えないで」

咲「ないことあるかいな。見てたやん（中略）ほな、あんた・・・・・・わたいに言えんような夢見てたんか」

八「・・・・・・おかしなことを言うない。見てたら言うがな。夢なんか見た覚えないさかい、見てえへんちゅうてんのや」

咲「見てたて。あんたがな、どんな夢見ようとも、わてがなんぼ悋気しいでも、たかが夢の話やないかいな。そんなことでごじゃごじゃ言うかいな。あほな夢見なはんな言うて、わーっと笑ろうたら、それでしまいやないか。あんたが隠し立てするよってに」

八「何が隠し立てや・・・・・・ほんまにわし夢なんか見てえへんのや」

咲「あ、そう・・・・・・ええがな・・・・・・昔からあんたはそうや・・・・・・薄情なとこがあるねん・・・・わたいがこないして貧乏所帯のやりくりを長年」

これが、後に大騒動になるそもそもの始まりであるが、当初は実に他愛もない妻夫間の日常会話であった。但し、特筆すべきは喜八が昼寝していた現場で傍に居て目撃したのは妻女のお咲さんだけであって、話の展開上は貴重な場面である。この後は、お咲さんの伝聞で喜八が夢

を見たらしいこと、そしてその夢が如何にも奇抜で面白そうであった、ということを頼りに騒動が拡大化していくのである。お咲さんの人称代名詞使用は「わたい、わて、あんた」、喜八は「わし」であった。しかし感情が昂ぶってくるとお咲さんは「ふん、ちょっとおのれが理屈に詰まったらぼーんといくやなんて・・・・・・ええがな。どつくなと蹴るなと、ええようにせい」、「なんなとしたらええがな、いっそ殺せ」と急激に荒い言葉になってくる。「おのれ」は対称詞ではなく、「自分が」という意味合いであるが、そうとしても乱暴である。また本動詞の命令形も、「ええようにせい、いっそ殺せ」と野卑度の極致にまで達している。この後、隣家の徳さんが喧嘩の仲裁に入ってくるのであるが、喜八は徳さんとの間でも同じような言い合いになってしまう。次には家主が仲裁に入ってくるのであるが、又もや夢の中身が気に懸かる。「家主と店子は親子も同様の間柄、ましてわしゃ町役じゃ。町役人を勤めておれば、いざ何ぞごとのときには親代わりになって面倒も見んならん。その親代わりである町役のわしにも、夢の話はでけんちゅうのか」と、三度同じ展開になる。家主は思い余って願書を認め、西の御番所に届け出た。ここでもまた、与力が裁かずにお白洲の場面となる。

(13) 奉「家主幸兵衛、面を上げい。差し出されたる願面によれば、そのほう、店子喜八なる者の見たる夢の話を聞きたがり、それを物語らぬ故に、店立てを申し渡したとあるが、まことか・・・・・・まことか。不所存者めがっ。こりゃ、家主とか町役なんぞと申す者は下々、町人百姓どもの鑑ともならんければ相成らん者じゃ。それが、たかの知れたる夢の話を聞きたがり、しゃべらぬゆえに家を空けえなどとは不届き千万。ほかの町役どももよく承れ、かかる馬鹿ばかしきことにて上多用のみぎり、手数をかくる段、不届きの至り。きっと叱りおくぞ……ああ喜八とやら。これはそのほうの勝ちじゃ。家を空けるには及ばん、分ったか。裁きはそれまで、一同の者、立ちませい。うむ馬鹿ばかしいことを……ああ喜八とやら、これへ……いやなにそのほう、家主が夢の話物語らんにおいては家を空けいとまで迫ったるときは、さぞ驚いたことであろうな」

八「へぇ、もう町役まで務めてはる家主さんと喧嘩して放り出されたとなると、よその長屋も嫌がって入れてくれしまへんので、どないしょうしらんと思うとりました。ありがたいこってございます」

奉「上にも眼がある。かかる馬鹿ばかしきことのまかり通る御政道ではない。が、しかしそのほう、家主が町役の権柄を以って、夢の話語れと迫ったるにもかかわらず、男子の一存金鉄の如く、断じてしゃべらなんだとは天晴れ大丈夫の志、奉行ことごとく感服いたす。はじめ女房が聞きたがり、隣家の男が聞きたがり、家主までもが聞きたがったる夢の話……、奉行にならばしゃべれるであろう」

誰もが夢の中身を聞きたがるという単純な繰り返しなのであるが、どうやら、後になるほど期待が高まって、なんとしても喜八からそれを聞き出そうという執念らしきものが感ぜられるようになっているのである。この段は奉行がお裁きで一件落着となっているのであるが、町役や家主や喜八に対しては尊大的な態度である。「ほかの町役どももよく承れ」という中の「ども」という接尾辞一つを取っても、尊大語の片鱗が窺える。お裁きを下すまでは奉行らしい行

いであったが、喜八を呼び止めたのは夢の中身を聞き出すためであった。しかし喜八は、「たとえお奉行さんが相手であっても見てない夢の話はできまへん」と頑なであった。奉行は一転して「将軍家のお眼鏡を以って奉行職を勤むる余にも、夢の話物語ることならんと申すか。かく言いだしたる上からは重き拷問に行のうても、夢の話聞き出してみせるが、どうじゃ」と威丈高になる。とうとう喜八は奉行所の松に、高手小手に吊されてしまうのであった。縄目が食い込んで意識が朦朧とした喜八であったが、気が付くと縄が解けている。天狗によって鞍馬の山奥まで連れてこられたのであった。

(14) 八 「あっ、あんた、天狗さん」
天 「心付いたか」
八 「ここは一体、どこでございます」
天 「ここは鞍馬の奥、僧正谷である」
八 「鞍馬山までわたい連れてこられましたんかいな」
天 「久々に大阪の上空を飛行しおれば、世にも不思議な話を聞いた。天下の奉行ともあろう者が、たかの知れた素町人の見たる夢の話を聞きたがり、拷問にかけて責め問うなんぞは奇怪千万、あのような者に人は裁けん。天狗が代わって裁いてつかわした。そのほうに罪はない。不憫な故をもって助けとらしたのじゃ」
八 「ありがとうございます。もう死ぬんかいなと思うとりました」
天 「たわけたことよのう。初め女房が聞きたがったは女人のことじゃが、隣家の男が聞きたがり、家主が聞きたがり、奉行までが聞きたがる。天狗はそのようなものは聞きたがらぬ故、安心をいたせ」

上掲の奉行取り調べと比べてみるとよく分かるが、天狗の言葉遣いは奉行の侍言葉と全く同じと断定できるほど似ている。超人的存在であるが故に、天狗の話し言葉として参照できるような資料は皆無であったろう。必然的に、奉行と同じような言葉遣いにせざるを得なかったと言えよう。喜八も奉行に対するのと同様に、天狗に対しても丁寧な言葉遣いで遇している。「素町人」の「素」という接頭辞は珍しい。「素っ裸、すっぽんぽん」の「素」と共通であろう。「裁いてつかわした、助けとらした」における「つかわす、とらす」という複合動詞後半部も尊大語的である。

「天狗はそのようなものは聞きたがらぬ故、安心をいたせ」というのは立て前で、「天狗は、そのようなものは聞きとうはないが、そのほうがしゃべりたいというのならば・・・・・・聞いてやってもよいが・・・・・・」と恩着せがましく本心を漏らすのであった。喜八はここでも夢は見ていないと繰り返すので、五体は八つ裂き、杉の梢に掛けられると脅されて、天狗の長い爪が体に食い込んできたところで目が覚めた。妻女が「ちょっと・・・・・・ちょっと、あんたあ、えらいうなされて・・・・・・一体どんな夢見たん」でサゲになる。つまり、冒頭の場面に戻ったのである。これを「廻りオチ」という。

ここで、この噺に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表三　『天狗裁き』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
喜八	私　　わし　　わたい　わて
妻女	私　　わたい
徳さん	わし　　わて　　わい
家主	わし
奉行	余
天狗	わし

対称詞

話し手	対称詞　（相手）
喜八	あんた（天狗）　お前（徳さん）
妻女	あんた（喜八）
徳さん	お前（喜八、妻女）
家主	お前（徳さん）
奉行	そのほう（家主、喜八）
天狗	そのほう（喜八）

場面が移るに連れて、喧嘩の仲裁がお裁きになり、人称代名詞使用も変化が見られる。奉行と天狗の人称代名詞使用について大きな違いは、奉行の自称詞が「余」であるのに対して天狗が自称詞を「わし」としている点である。ここから、「余」というのは公的な状況で然るべき立場の者が自称詞として用いる場合に限られるという一般則が考えられる。天狗は、いかに超人的存在であるとは言え、喜八とはお裁きの場でもなければ公的な関係でもない。そういう状況では「余」という自称詞は用い得ないのである。そして両者とも、喜八に対しては「そのほう」と呼んでいる。また、「わし」という自称詞は妻女と奉行を除いて全員が用いていた。これは「わし」が広い階層で自称詞として用いられていることの一例である。全体としては、奉行と天狗は家主以下町人と異なる社会的階層に属しているという実態が見て取れる。

第六節　纏め

ここで本稿での検証について総括しておきたい。まずは一人称代名詞である。本稿で言及していない「わたくし、わたし、やつがれ、それがし」も含め、男性の自称代名詞である。

(15)　①朕　②麿　③余、身　④身共　⑤やつがれ　⑥それがし　⑦わたくし　⑧この方　⑨わたし

続けて、女性の自称代名詞を卑尊度順に並べる。男女両用で重複する「わたくし、わたし」

には上掲と同じ番号を振る。

（16）　⑩わらわ　⑦わたくし　⑨わたし

女性の登場人物と登場場面そのものが男性に比べて圧倒的に少ないという事情もあるが、男性の九例に対して僅か三例しかない。まずは、「朕、麿、余」というような身分制に基づく自称詞が女性にはないという背景が挙げられる。「身共、やつがれ、それがし」というのも武士階級固有と言えるほど身分制と結びついている。ここで挙げた男女両形十二例のうち、現代にまで生き残っていると言えるものは男女両用の「わたくし、わたし」二例のみであるというのも、身分制下での社会的背景が窺える。逆に言うと、このような身分制度が実質的になくなった現代においては、自称代名詞の多様性が乏しいのである。

次に対称詞としては「そち、その方」の二例に留まった。場面としては、店の当主が丁稚に呼びかける場合と、お裁きの場で奉行が訴人に話しかける場合であった。尊大語そのものが侍言葉が占める比重が大きいことを勘案すれば、店の当主が丁稚に「そち」という対称詞を用いている事実は興味深い。

次に尊大語の本動詞であるが、これは「遣わす、差し許す、申しつける、控える、致す、とらす」の六つのみである。『らくだ』においての「差し許す」を除いて、政談ものなど奉行の言葉遣いにほぼ限定されると言える。本来的に尊大語を用いる人物や状況が限定されるため、収集される用例が少ないという事情を勘案せねばならないであろう。

補助動詞は「まいる、おる、とらせる」である。本動詞と同様に、尊大語は用いられる場面や状況が限定されるため、実例は少ない。

また、役職のような一般名詞を自称にすると尊大語的な機能を有する面についても再考しておかねばならない。実例としては政談もので「奉行」という自称例が見られたのみであった。現代社会に置き換えてみると、家庭内で父親が子に向かって「お父さんは、、、」というように話しかけた場合、父親という立場を言語的に実現しているという観点で尊大語的要素が潜在しているように考えられる。尊敬語では、現代においても相手に対して「課長、部長」というような役職名で呼びかけるのと平行関係にあるように思われる。この点については、今後の研究課題としておく。

参考文献

桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻　増補改訂版。大阪：創元社。
角岡賢一（2021）『上方落語に見られる待遇表現』東京：くろしお出版。
釈撤宗（2010）『おてらくご　落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
小佐田定雄（2018）『上方らくごの舞台裏』東京：筑摩書房。
桂枝雀（1995, 1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。
桂米朝（編、2007）『四世桂米團治寄席随筆』東京：岩波書店。
桂米朝（2013, 2014）『米朝落語全集』全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。

角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第 28 巻。pp.3-22。
角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）所収。
菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
髙島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇 B。
前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。

The Lyke Wake Dirge: Hosen and Shun

Simon Rosati

▶Key words

Lyke Wake Dirge;
Folk song; Paganism;
Christianity; Shoes;
Hosen and Shun; Shoon;
Yorkshire; Cleveland

▼Abstract

This is the first of three articles considering elements of the folk song *Lyke Wake Dirge* (Roud 8194). It concerns itself with the first element, *hosen* and *shun* (legwear and footwear). It describes ways in which writers have made connections between paganism and the shoes mentioned in the song. It concludes that the song is Christian, echoing the gospel of Matthew.

The Lyke Wake Dirge: Hosen and Shun

The *Lyke Wake Dirge* (Roud 8194) is a song that describes the journey of the soul of a recently dead person as it attempts to make its way to heaven. The lyke is the corpse, as we still see in the lychgate outside English churches, and in German *Leiche*. The wake is a ceremonial watching over the dead person, long abandoned in England but more familiar in Ireland. A song for the dead is a dirge, with the word 'dirge' deriving from the Latin *dirige*, the first words of the matins ceremony for the dead, said in the presence of the corpse (Duffy 2022: 369). It was first recorded in writing by John Aubrey in around 1686 in his collection later published as *Remaines of Gentilisme and Judaisme* (1972: 176-178). Aubrey's informant said the song was sung 'about 60 yeares since at Country vulgar Funeralls' in Yorkshire, which gives a date of 1626 or so. This is the text given by Aubrey:

This ean night, this ean night;
Every night and awle:
Fire and Fleet and candle-light
And Christ receive thy Sawle.

When thou from hence doest pass away
Every night and awle
To Whinny-moor thou comest at last
And Christ receive thy Sawle.

If ever thou gave either hosen or shun
Every night and awle
Sit thee downe and putt them on
And Christ receive thy Sawle

But if hosen nor shoon thou never gave nean
Every night, &c:
The Whinnes shall prick thee to the bare beane
And Christ receive thy Sawle.

From Whinny-moor that thou mayst pass
Every night &c:
To Brig o'Dread thou comest at last
And Christ &c:

From Brig of Dread that thou mayst pass
Every night &c:
To Purgatory fire thou com'st at last
And Christ &c:

If ever thou gave either Milke or drinke
Every night &c:
The fire shall never make thee shrink
And Christ &c:

But if milk nor drink thou never gave nean
Every night &c
The Fire shall burn thee to thy bare bane
And Christ receive thy Sawle

The first of the three obstacles the soul of the departed has to pass is Whinny-moor, and that is our concern here. The moor is full of thorns which will cut the feet and legs. If the dead person gave 'hosen or shun/shoon' in life, they will receive them again and will pass the moor unhurt. Hosen refers to legwear, with a wider meaning than the modern hose (cf. German *Hose*, trousers), and shun or shoon means shoes.

We find this idea of shoes in Nordic tradition. It occurs in the Icelandic *Saga of Gisli*, dating perhaps to 1230 (Faulkes 2001: xv). A man called Vestein has been murdered and as his body is being prepared for burial one man remarks (Faulkes 2001: 22):

> It is a custom to tie Hel-shoes on men which they should walk in to Valhall.

Hel, or Hell, is the Nordic realm of the dead. There is no suggestion that it is a place of punishment. Quoting this passage, Wylie (1855: 152) calls them death-shoes. Hardwick (1872: 181) says (see also Kelly 1863: 115):

> According to Mannhardt and Grimm a pair of shoes was deposited in the grave for this very purpose [to pass the thorny moor]. In the Henneberg district, on this account, the name *todtenschuh*, or "dead shoe" is applied to a funeral. In Scandinavia the shoe is named *helskö*, or "hel-shoe".

There is clearly, then, a pagan association to the shoes in the *Lyke Wake Dirge*. The Rev. John Atkinson was the incumbent (parish priest) of Danby in the North York Moors, in the Cleveland district where the *Lyke Wake Dirge* was found, from 1847 to 1900. His 1891 book *Forty Years in a Moorland Parish* lays considerable stress on the Danish connections of the area, for example when talking of local burials (p 231):

> But at least we know that, among our Scandinavian ancestors at least, the hell-way and the hell-shoes and the difficult and perilous passage to be essayed by the dead were as constantly thought of and provided for as the occurrence of death itself.

He also mentions a woman buried with a pair of brogues, among other useful objects (p 215).

There is in all this, however, no idea of reward for having lived a good life. Let us look at some Catholic (pre-Reformation Christian) examples. One close parallel is in the Norwegian poem, or ballad, *Draumkvæde*, the vision of one Olaf Åsteson. It is of uncertain date, but clearly pre-Reformation. Liestøl (1946: 130) dates it to the mid-thirteenth century. Barnes (1974: 102) dates it to the 16th century or earlier. In the poem, or ballad, Olaf falls asleep on Christmas Eve and wakes up at Epiphany, during which time he has a vision which resembles the events in *Lyke Wake Dirge*. Relatively early in the text, as reconstructed by Moe, we read (Liestol 1946: 10):

First I went forth with my soul,
I went through briar and thorn,
and torn was then my scarlet cloak,
and the nails from my feet were torn.
The moon it shines,
and the roads do stretch so wide.

Towards the end of the text, we read (p 15):

Blest is he who in this life
gave shoes to the needy poor:
he will not have to walk bare-foot
on the sharp and thorny moor.
Tongue shall speak and truth
reply on Judgment Day.

The shoes are clearly a specific reward for good behaviour. Shoes also occur in the *Vision of Gottschalk* (Gardiner 1993: 108):

> Gottschalk, a peasant from Holstein, lies as if dead from Christmas Eve 1188, until the fourth day of Christmas. During his trance he is guided through the otherworld by two angels. He is shown a tree of shoes, which are awarded to the merciful so that they might walk across the thorny moor unharmed. Initially Gottschalk is not given shoes, and after his return to life he bears the marks of his punishment. At one point, however, one of his guides takes mercy on him and returns for a pair of shoes.

This is less specific, mentioning merciful behaviour rather than actually giving shoes, but is similar.

Blakeborough (1898: 123) suggests something more specific, and frankly comical:

> the soul on approaching Whinny Moor would be met by an old man carrying a huge bundle of boots; and if amongst these there could be found a pair which the bare-footed soul had given away during life, the old man gave them to the soul to protect its feet whilst crossing the thorny moor.

Scott (1931: 398) quotes a manuscript from Cleveland in the Cotton library in the time of Elizabeth I (reigned 1558-1603):

> it is good to give a pair of new shoes to a poor man, for as much, as after this life, they

> are to pass barefoote through a great launde, full of thornes and furzen, except by the meryte of the almes aforesaid they have redemed the forfeyte; for, at the edge of the launde, an oulde man shall meet them with the same shoes that were given by the partye when he was lyvving; and, after he hath shodde them, dismisseth them to go through thick and thin, without scratch or scalle.

In the eyes of some Protestants, it does not matter whether the belief is pagan or Catholic, as it is mere superstition in any case. Tylor (2016: I, 495) says the *Lyke Wake Dirge* is 'like some savage or barbaric legend'. He also mentions it in comparison with the Hindu belief that:

> he who gives water or shoes to a Brahman will find water to refresh him, and shoes to wear, on the journey to the next world

Or as Ward puts it (1817: II, 79), haven given shoes to a bramhun, 'he will not suffer from the heat of the ground'. It would seem that, to Tylor at least, Catholics and Hindus are savages. Scott (ibid.) calls the song 'a sort of charm' that 'the lower ranks of Roman Catholics' believe in their 'fondness' (credulity), an attitude that Pittaway (2016) describes as 'patronising'. Barnes (1972: 42) quotes a satirical Swedish poem from the 1580s:

> Teach your flock to believe in the gates of hell and *gillebro* [the Brig o'Dread], across which they needs must go barefoot upon the many iron pincers, unless they give you a pair of shoes with as much money in them as they can hold; in that case nothing shall harm their feet, although their purse must suffer a knock.

Barnes also quotes some words added to a manuscript of *Draumkvæde*, possibly in 1842 (p 155):

> the old Norwegian heathens and Papists had accepted the transmigration of souls in the most mystical, fanatical, superstitious and horrifying portrayals and terrifying images.

There are problems with such statements. First, to many in the West today, all religious belief is superstition, undermining Protestant claims. Second, many Catholics no doubt did take such stories literally (and many continue to believe in Purgatory), but the idea that no one could think figuratively is absurd. Nor should the idea that the song is 'rooted in a recognizably northern landscape' (Marshall 2002: 139) concern us: where else would it be set? Third, and most important, the idea of receiving a reward in kind for good behaviour is Biblical. It may be found in Matthew 25: 31-46, describing the Last Judgment:

> Then the King will say to those on his right hand, "Come, you whom my Father has blessed, take as your heritage the kingdom prepared for you since the foundation of the world. For I was hungry and you gave me food, I was thirsty and you gave me drink, I was a stranger and you made me welcome, lacking clothes and you clothed me, sick and you visited me, in prison and you came to see me." Then the upright will say to him in reply, "Lord, when did we see you hungry and feed you, or thirsty and give you drink? When did we see you a stranger and make you welcome, lacking clothes and clothe you? When did we find you sick or in prison and go to see you?" And the King will answer, "In truth I tell you, in so far as you did this to one of the least of these brothers of mine, you did it to me." (Verses 34-40, New Jerusalem Bible)

This is, of course, figurative. Scott mentions that very similar words are used in the Russian [Orthodox, not Catholic] funeral service. Here we have clothing, not just the shoes of Nordic tradition, so the hosen make sense in this context. In the version of *Draumkvæde* given by Jonsson (1967: 203) the need to give shoes, rye, corn and bread are mentioned, and then:

> Happy he who on this earth
> Clothes gave to the poor,
> Never in the Other Life
> Mockery need fear.

One presumes that the mockery would be for being naked. Jonsson calls these five stanzas '"The Beatitudes" with strange features from medieval belief in the other world' (p 197), yet they are perfectly Biblical.

It is also easy to forget that Matthew's gospel dates to around 80 or 90 AD, far older than any evidence of Nordic pagan tradition. The early Scandinavians were great travellers and could easily have been influenced by ideas from Christian lands.

The Christian churches have always incorporated older beliefs, including local deities, and holy places. The song may indeed incorporate pagan ideas, though some people have surely been too keen to minimize Christian influence. Atkinson (1891) is so keen on the old Danish, pagan, influence on his Cleveland parish that he refuses to accept any Anglo-Saxon presence before the Viking settlement (p 260). He also, in his history of the area, jumps from 1432 to 1626 (pp 292-293), thus avoiding the need to address the Reformation and the presence of Catholicism in Cleveland.

The version of *Lyke Wake Dirge* given in Aubrey and Scott is clearly Catholic. Blakeborough (1898: 123-124) gives a later version from the same area, from around 1800, without Purgatory. One may question whether that is enough to make the song acceptably Protestant, given the continuing stress on good works (Catholic) as opposed to faith alone (Protestant). Hutton (1995: 93) suggests that this continued to be quite widely found in post-

Reformation folklore. Moorman (1919: 103-106) gives another version, also without Purgatory, and without reward:

> 'T were a dree [gloomy] neet, a dree neet, ower Whinny-moor to trake [wander],
> Wi' shoonless feet, ower flinty steanes, thruf monny a thorny brake (p 105; Moorman's glosses)

In any case, Blakeborough points out that Whinny Moor is 'mythical' (p124).

One modern reaction to this story is the poem *Whinny Moor* by Blake Morrison (published in the *London Review of Books*, 2 April 1987). The poem starts by quoting the words of Blakeborough above, about meeting an old man with a bundle of boots. The poet has spent the day walking another area of Yorkshire moorland, not Cleveland, is still some way from his goal, is very tired, and comes across a man in a car:

> He glanced, disbelieving, at my plimsolls,
> frayed and holy with a flapping sole.
> He was a rep for Peter Lord, he said,
> nodding behind him at the bootful of boots.
> 'Ah've worked in shoes near alf a century
> an sin all t'flippin lot go reet down'ill.'

Later, Morrison thinks about how he left the area as a young man, wonders why he has come back, and finally imagines a voice telling him:

> *So thank thi lucky stars yon ol divel's*
> *gi'en thi some pumps to get ell out again*
> *an shift thisen sharpish to t'nearest stickle*
> *afore tha's eaten up by t'worms or us.*

All but barefoot on a Whinny Moor and saved by an old man with a bundle of boots – but in this world, and his, quite correct, kindness was to himself.

We may wonder whether people really believed that the newly dead needed a pair of shoes and trousers to reach the otherworld destination safely. We may regard it as superstition. Yet all sorts of items are placed in coffins in Britain today. A quick glance at the Internet shows that photos, letters, flowers and teddy bears are all permitted, but that, for cremations, bottles of alcohol, leather goods, coconuts (sic), e-cigarettes and mobile phones are not. One infers that all these have been considered at some time. Episode 4 of series 5 of the British TV drama *Death in Paradise* (2016), *A Personal Murder*, starts with someone receiving a text message from a phone just buried with a dead man; being buried with one's

phone is clearly quite usual.

The point of the song is simple, and stark. Your deeds in this world will affect your lot in the next one, a kind of instant karma. It may be seen as harsh, even cruel, when sung at the time of death, at a wake in the dead person's house, but it could also be reassuring, depending on the stress given to the good deeds. Good deeds may not be rewarded in this world, nor bad ones punished, but it is difficult to think that virtue may never be rewarded.

Bibliography

Atkinson, J. (1891) *Forty Years in a Moorland Parish*. London: Macmillan.

Aubrey, J. (1972) *Three Prose Works*. Ed. J. Buchanan-Brown. Fontwell, Sussex: Centaur Press.

Barnes, M. (1974) *Draumkvæde*. Oslo: Universitetsforlaget.

Blakeborough, R. (1898) *Yorkshire Wit, Character, Folklore & Customs of the North Riding of Yorkshire*. London: Henry Frowde.

Duffy, E. (2022) *The Stripping of the Altars. Traditional Religion in England, 1400-1580*. New edition. New Haven, Connecticut: Yale University Press.

Faulkes, A. (Ed.) (2001) *Three Icelandic Outlaw Sagas*. London: Everyman.

Gardiner, E. (1993) *Medieval Visions of Heaven and Hell: A Sourcebook*. New York: Routledge.

Hardwick, C. (1872) *Traditions, Superstitions and Folk-Lore*. Manchester: A. Ireland.

Hutton, R. (1995) "The English Reformation and the Evidence of Folklore", *Past & Present* 148/1, pp 89-116.

Jonsson, B. R. (1967) "*The Dream Ballad*", *in European Folk Ballads*, Ed. E. Seemann & D. Strömbäck, Copenhagen: Rosenkilde & Bagger, pp 196-203.

Kelly, W. K. (1863) *Curiosities of Indo-European Tradition and Folk-Lore*. London: Chapman & Hall.

Liestøl, K. (1946) "Draumkvæde. A Norwegian Visionary Poem from the Middle Ages", in *Studia Norvegica Ethnologica & Folkloristica* Vol. I. Oslo: H. Aschehoug.

Marshall, P. (2002) *Beliefs and the Dead in Reformation England*. Oxford: Oxford University Press.

Moorman, F. W. (1919) *Yorkshire Dialect Poems* (*1673-1915*) *and Traditional Poems*. London: Sidgwick and Jackson.

Morrison, B. (1987) "Whinny Moor", in *The London Review of Books*, Vol.9 No.7, 2 April 1987.

Pittaway, I. (2016) *The Lyke-Wake Dirge: the Revival of an Elizabethan Song of the Afterlife*. https://earlymusicmuse.com/lyke-wake-dirge/

Scott, W. (1931) *Minstrelsy of the Scottish Border*. Ed. T. Henderson. London: Harrap.

Tylor, E. B. (2016) *Primitive Culture*. Two volumes. Mineola, New York: Dover.

Ward, W. (1817) *A View of the History, Literature and Religion of the Hindoos*. Third edition. Two volumes. London: Baptist Missionary Society.

Wylie, W. M. (1865) "The Graves of the Alemanni at Oberflacht in Suabia", in *Archaeologia, Or, Miscellaneous Tracts Relating to Antiquity*, Vol.36, Issue 1, pp 129-160. London: Society of Antiquaries of London.

森鷗外『知恵袋』と Adolph von Knigge „Über den Umgang mit Menschen“ をめぐって

國　重　　裕

▶キーワード

森鷗外、
アドルフ・フォン・クニッゲ、
『知恵袋』、
『人との付き合い方』

▼要　旨

C'est en 1898 que Mori Ogai publie dans le journal *Jiji shimpo* une série de maximes *Chiebukuro*, ensemble de règles de savoir-vivre et de considérations sur l'art de débrouiller dans sa vie et sur bonnes manières. Ogai publie ensuite un recueil sérialisé d'apophtegmes sous le titre Shintogo dans le journal *Niroku shimpo*. Ces recueils, uniquement sortis en revue de son vivant, furent inclus aux œuvres complètes de Mori Ogai publié par Iwanami Shoten en 1937.

C'est en 1980 que le critique Kobori Keiichiro a découvert qu'il ne s'agissait pas d'une création mais d'une traduction abrégée de l'ouvrage de *Ueber den Umgang mit Menschen* d'Adolph von Knigge, publié en allemand en 1788.

Un nouvel examen de *Chiebukuro* révèle qu'il suit peu ou prou le texte original, mais que les exemples de Knigge ont été remplacés par événements de l'époque d'Edo et des légendes de la Chine ancienne. En certains endroits, les réécritures d'Ogai complètent le texte original, tandis que dans d'autres, les récits donnés en exemple ont fait l'objet d'une substitution radicale.

Dans ce traité, j'apporterai un éclairage sur les procédés auxquels Ogai a recouru dans sa réécriture de Ueber dem Umgang mit Menschen, en comparant ses choix à ceux de Knigge. À partir de ce travail de réappropriation, je souhaite mettre en évidence une vision du monde qui lui est propre et diffère de celle de l'auteur allmend.

はじめに

森鷗外（本名、森林太郎。1862〜1922）が、1898年『時事新報』紙に連載した箴言集が『知恵袋』である。『知恵袋』は、人付き合いのあり方をはじめ、処世術やマナーに関する考察から成っている。つづいて鷗外は『心頭語』と題し箴言集を『二六新報』紙に連載する。これらの箴言集は、生前単行本として刊行されることはなく、1937年に岩波書店から刊行された鷗外全集によって、ふたたび日の目を見た。

鷗外の箴言集が講談社学術文庫として1980年に発行されるにあたって、編者であり、鷗外の擬古文を現代語訳した小堀桂太郎によって、『知恵袋』が森鷗外の純粋な創作ではなく、1788年にドイツ語で出版されたアドルフ・フォン・クニッゲ（1752〜96）の『人との付き合い方』の抄訳、自由な翻案であることがつきとめられた。小堀は、鷗外の原稿とクニッゲの『人との付き合い方』の排列の対照表を巻末に添えて、『知恵袋』の文庫本を世に送り出した[1]。

小堀は、この文庫に収められた鷗外の別の箴言集『慧語』については、オリジナルのショーペンハウアーのアフォリズム（じつはイエズス会士バルタザール・グラシアンの原作をショーペンハウアーがドイツ語に翻案したもの）も翻訳し、鷗外の訳文とショーペンハウアーの原文を読者が比較できるように便宜を図ったが、『知恵袋』およびその続篇『心頭語』まではクニッゲの原文の紹介まではせず、「解説」で説明し、対照表を巻末に掲げるにとどめている。クニッゲの『交際法』が大部であるため、文庫本という体裁上、この判断はやむをえなかったといえよう。

本論の目的は、クニッゲの『人との付き合い方』と鷗外の『知恵袋』の異同を照らし合わせることで、鷗外版『知恵袋』の特徴を浮かび上がらせることにある。『知恵袋』については、水内透「鷗外研究　アードルフ・フォン・クニッゲ－森鷗外の『知恵袋』との関連において　I　&　II」（『山陰地域研究（伝統文化）』第11号、1995年3月、同第12号、1996年3月）、ローザ・ヴナー（森ゆりこ訳）「『知恵袋』研究－クニッゲ『交際法』の鷗外による受容について」森鷗外記念会編『鷗外』第66号、2000年）が詳しい。本論でも、これらの先行研究を参照しつつ、筆者の独自の知見を付け加えていきたい。

さて、クニッゲの『人との付き合い方』は、刊行以来ドイツ語圏で版を重ね、19世紀のブルジョワ家庭では「一家に一冊ある」といわれるほど読み継がれたベストセラーにしてロングセラーであった[2]。ドイツの人々はこの本の内容を参照して、処世術、社交術を身につけたといわれる。事実、クニッゲの書は、良い友の見つけ方、良い伴侶の見分け方、夫婦喧嘩の仲裁法、お金の使い方など、日常のごく卑近なことがらについて、逐一ていねいすぎるほどに助言と教訓を与えている。おそらく鷗外は、ドイツに留学した際にこの本に触れたのであろう。

しかし、先行研究があきらかにしているとおり、クニッゲの『人との付き合い方』はもともといわゆるハウツー本ではなかった。クニッゲの生きた時代は啓蒙の世紀にあたり、『人との付き合い方』もフランス革命勃発の前年に刊行されていることから想像できるとおり、当時の時代の世相を反映したものであった。すなわち、フマニスムスと寛容の精神を備えた人間どうしが交際することで、調和の取れた理想的な社会を生み出そうとする、その指針として書かれ

たものである。カントの『永遠平和論』が1795年に刊行されたことを考え合わせると、時代の空気が伝わるであろうか。ちなみに、クニッゲの書が刊行された1788年には『実践理性批判』が刊行されている。またクニッゲより3歳年上のゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を刊行したのは1796年、クニッゲが没した年のことであった。

1. クニッゲの生涯と啓蒙の世紀ーそのコスモポリタニスム

ここでクニッゲの略歴を紹介しておこう。1752年ハノーファー近郊の出身。裕福な家柄であったが、12歳の時に母が、14歳の時に父が借財を残して他界すると、困窮した生活を送ることになる。20歳でカッセルの宮廷に仕官すると、持ち前の知性と才長けた話術で宮廷の人気者になる。しかし、権謀術数渦巻く宮廷に嫌気がさし、みずから讒謗を受けたことも関係し、カッセルを去る。有能であることより、権力者の寵愛を受けることの方が出世の糸口になる生活に、青年クニッゲは違和感を覚えたのであった。このころより、フリーメーソンに関心を持ち、入会する。詳細は省くが(3)、ここでもクニッゲは挫折を味わう。経済的に貧しかった彼は、フリーメーソンの位階のなかで金銭的な理由から昇級が認められなかったのであった。みずから創設に関与した秘密結社でも、同僚との路線対立が原因で退会を余儀なくされている。こうした宮廷と秘密結社で体験した、人間関係の理想と現実が、『人との付き合い方』に如実に反映していることは想像に難くない。

またフランス革命前夜に執筆活動を開始したクニッゲは、たえずその言動を秘密警察に監視されていた。実際フランス革命後、「啓蒙主義は革命の導火線になるものではないこと」「自著が革命に加担するものではないこと」を公表することをクニッゲは強いられている（好評を得た『人との付き合い方』だが、フランス革命勃発にともない、検閲を恐れ、穏当な内容に書き換えられた）。もともと体の弱かったクニッゲは1796年に43歳の若さで亡くなっている。

さて、いささか長々とクニッゲの半生をたどってきたのには訳がある。啓蒙主義の興隆、ドイツ諸国における旧態依然とした封建体制との確執、緊迫した時代情勢、その中であくまで理想の社会を築こうとしたクニッゲの政治的感覚が、鷗外の『知恵袋』からはすっぽり抜け落ちているのである。筆者は、まずこの点を強調しておきたい。

2.『人との付き合い方』と『知恵袋』の比較

ここで、あらためて鷗外の『知恵袋』をひもとくと、おおよそはクニッゲの原文に従っているが、江戸時代や中国の故事がエピソードとして追加されていることに気づく。

例1　クニッゲの原文と鷗外の訳がほぼ一致している例

三十五　嘲弄

席上にて人を弄するは、世慣れたるものの為ざることの一つなるべし。彼もし我より愚かならば、これを弄せんは徒労ならん。彼もし意外に我より智ならば、我の敢てこれに嘲弄を試みたる恥を奈何せん。彼もし情ある人ならば、我はこれを窘しめたる粗笨漢たるべ

し。彼もし睚眦の怨みを報ずるものならば、我はこれを激したる迂闊者たるべし。嘲弄の戒めを持することの最も慎密なるべきは、衆人に押さるる身となりたる人の上なり。われは一言の毒の能く社交上に人を殺したるを見しこと数々なり。

Suche keinen Menschen, auch den Schwächsten nicht, in Gesellschaften lächerlich zu machen! Ist er dumm; so hast Du wenig Ehre von dem Witze, den an ihm verschwendest; Ist er es weniger, als Du glaubst, so kannst *Du* vielleicht der Gegenstand *seines* Spottes werden; Ist er gutmüthig und gefühlvoll; so kränkest Du ihn, und ist er tückisch und rachsüchtig, so kann er Dir's vielleicht auf eine Rechnung setzen, die Du früh oder spät auf irgend eine Art bezahlen musst. (...)[(4)]

例 2　クニッゲの原文に存在しないエピソードを鷗外が挿入している箇所

一　自ら定むる価　「宗臣が劉一丈に報いる書」[(5)]

Ich habe einen Menschen gekannt, der auf diese Art von seiner Vertraulichkeit mit dem Kaiser Joseph und dem Fürsten Kaunitz redete, obgleich ich ganz gewiß wusste, daß Diese ihn kaum dem Namen nach, und zwar als einen unruhigen Kopf und Pasquillanten kannten. Indessen hatte er hierdurch, da niemand genauer nachfragte, sich auf eine kurze Zeit in ein solches Ansehen gesetzt, daß Leute, die bey Kaisers Majestät etwas zu suchen hatten, sich an ihn wendeten. Dann schrieb er auf so unverschämte Art an irgend einen Großen in Wien und sprach in diesem Briefe von seinen übrigen vornehmen Freunden daselbst, daß er, zwar nicht Erlangung seines Zwecks, aber doch manche höfliche Antwort erschlich, mit welcher er dann weiter wucherte.

皇帝ヨーゼフとカウニッツ侯爵の名前が、中国の故事に置き換えられている。

二　無過の金箔　徳川家綱「玉露叢」

本文にない逸話を鷗外が追加

八十三　復讎　徳川家康の逸話（出典不明）に置き換え

Wenn der Jähzornige nur aus Uebereilung Unrecht thut und über den kleinsten Anschein von Beleidigung in Hitze geräth, nachher aber auch ebenso schnell wieder das erwiesene Unrecht bereuet und das erlittene verzeyht, so verschliesst hingegen der *Rachgierige* seinen Groll im Herzen, bis er Gelegenheit findet, ihm vollen Lauf zu lassen. Er vergißt nicht, vergiebt nicht, auch dann nicht, wenn man ihm Versöhnung anbiethet, wenn man alles nur keine niederträchtigen Mittel anwendet, seine Gunst wieder zu erlangen. Er erwidert sowohl das ihm zugefügte wahre als vermeintliche Uebel, und dies nicht nach Verhältniß der Größe und Wichtigkeit desselben, sondern tausendfältig; (...) und ich kann da nicht rathen, als daß man soviel wie möglich vermeide, ihn zu beleidigen, und zugleich sich in eine Art von ehrerbiethiger Furcht bey ihm setze, die

überhaupt das einzige würksame Mittel ist, schlechte Subjekte im Zaume zu halten.

鷗外は、クニッゲの翻訳につづけて家康の挿話を追加している。なお鷗外は、原文で「一千倍」とあるところを、単に「倍」としている[6]。

百二十八　妻の貧富貴賤　「国語」に置き換え

百五十五　同志　「後漢書」[7]（同上）

二百十　旅　「相馬日記」「吉田氏の地名字書」（同上）

二百十一　貴人　右大臣源実朝「東鑑」（同上）

例 3　いかにもクニッゲの原文にありそうで、じつは鷗外の翻案にしかないもの

三十　問

人に物問ふは悪しき事にあらず、されど世には口より出づること悉く問となる人あり。かかる人の敵手となりて談ずるは、古の西班牙の宗教裁判（Inquisition）に逢ふに殊ならず、迷惑といふべし。

Belästige nicht die Leute, mit welchen Du umgehst, mit unnützen Fragen! Man findet Menschen, die, nicht eben aus Vorwitz und Neugier, sondern weil sie nun einmal gewöhnt sind, ihre Gespräche in Catechisations-Form zu verfassen, uns durch Fragen so beschwerlich werden, daß es gar nicht möglich ist, auf unsre Weise mit ihnen in Unterhaltung zu kommen. [8]

このように原文で「教理問答」とされているところを、鷗外は「宗教裁判　Inquisition」と変えている。

四十七　衣服

吾が識るところに痘痕満面の大漢子ありき。彼の醜さ余りて美しく見えきといふ革命時代のミラボオ（Mirabeaux）にも似たらんやうなるが、（…）

Und nun noch etwas über die Kleidung! Kleide Dich nicht unter und nicht über Deinen Stand; nicht über und nicht unter Dein Vermögen; nicht phantastisch; nicht bunt; nicht ohne Noth prächtig, glänzend noch kostbar; aber reinlich, geschmackvoll, und wo Du Aufwand machen musst, da sey Dein Aufwand zugleich ächt und schön! Zeichne Dich weder durch altväterische, noch jede neumodische Thorheit nachahmende Kleidung aus! Wende einige größere Aufmerksamkeit auf Deinen Anzug, wenn Du in der großen Welt erscheinen willst! Man ist in Gesellschaft verstimmt, sobald man sich bewusst ist, in einer unangenehmen Ausstaffierung aufzutreten.[9]

このように原文には、フランス革命時のジロンド派の英傑ミラボオについての言及はまったくない。鷗外は「縞は丈高きに過ぐる人に縦縞、丈低きに過ぐる人に横縞の似合ふ筈なし」とも書いているが、以上の引用から分かるとおり、これも原書にはない。

四十八　莚会

或る人のいはく、大いなる人物は莚会に往かでも人に棄てられざること、ビスマルク（Bismarck）の上を見て知るべしと。理ある言なり。

Wenn die Frage entsteht: ob es gut sey, viel oder wenig in Gesellschaft zu erscheinen; so muß die Beantwortung derselben freylich nach den einzelnen Lagen, Bedürfnissen und nach unzählichen kleinen Umständen und Rücksichten bey jedem Menschen anders ausfallen; Im ganzen aber kann man den Satz zur Richtschnur annehmen: daß man sich nicht aufdringen, die Leute nicht überlaufen solle und daß es besser sey, wenn man es einmal nicht allen Menschen recht machen kann, daß gefragt werde, warum wir so selten, als geklagt, daß wir zu oft und allerorten erscheinen.(10)

このように鷗外の翻訳は比較的原典に忠実である。しかし、ここで続けてビスマルクが例として追加されているのである。18 世紀の人クニッゲは、いうまでもなく 19 世紀ドイツの宰相ビスマルクの存在を知るはずもない。

八十七　吝嗇

最後に一の注意すべきことあり、画家に顔料を求める彫工に礬土を求め学者に書を借らんことを請ひて見よ。彼等はその物の価に拘らずして、意外なる吝嗇の色を見するならん。クニッゲ（Knigge）のいはく、我に阿蘭製の書翰紙一折を乞はんよりは、其価に数十倍せる金銭を乞へと。是も亦交際家の知らで協はぬ事ぞ。

Endlich noch andere sind in allen Stücken freygebig und achten das Geld nicht; in einem einzigen Puncte aber, worauf sie gerade Werth setzen, lächerlich geizig. Meine Freunde haben mir oft im Scherze vorgeworfen, daß ich auf diese Art karg in Schreib-Materialien sey, und ich gestehe diese Schwachheit. So wenig reich ich bin, so kostet es mich doch geringre Ueberwindung, mich von einem halben Gulden, als von einem holländischen Brief-Bogen zu scheiden, obgleich man für zwölf Groschen vielleicht ein Buch des feinsten Papiers kaufen kann.(11)

日本や中国の故事を引く鷗外とは異なり、クニッゲは、『人との付き合い方』において、ここにあるとおり、もっぱらクニッゲ自身の体験談、自分にまつわるエピソードを紹介して自説を補強する証左としている。この項目のみクニッゲの名前が『知恵袋』に登場するのは、ほかならぬクニッゲ自身の体験談を「例」として鷗外が紹介しているからにほかならないだろう。

百三十九　無愛の婚

独逸某の市に富家の女あり。己を娶らんと欲するものの、皆己を愛するが為ならず、己

の金を愛するが為なるを見て、自ら人に嫁せざらんことを誓ふ。

「ドイツのある町」を引き合いに出す原典はない。強いていえば以下の箇所。

Heyratet aber ein Mann eine reiche Frau; so setze er sich wenigstens in den Fall, dadurch nie ihr Sclave zu werden! Aus Verabsäumung dieser Vorsicht sind so wenig Ehen von der Art glücklich. Hätte meine Frau mir großes Vermögen zugebracht; so würde ich mich doppelt bestreben, ihr zu beweisen, daß ich geringe Bedürfnisse hätte; (...)[12]

百九十九　敵の残酷

シヨオペンハウエルは此待遇を忍ぶこと能はずして、彼の罵詈の語を以て充たされたる文を草し、「哲学教授等」を難じたりしなり。されど彼文はシヨオンペンハウエル集中の大汚点なること論なし。

Werde nie hitzig oder grob gegen Deine Feinde, weder in Gesprächen noch Schriften! und wenn böser Willen und Leidenschaft, wie es mehrentheils geschieht, bey ihnen im Spiel ist, so lasse Dich auf keine Art von Explikation ein! Schlechte Leute werden am besten durch Verachtung bestraft und Klatschereyen am leichtesten widerlegt, wenn man sich gar nicht darum bekümmert. / Wenn man daher unschuldig verleumdet, angeklagt, verkannt wird; so zeige man Stolz und Würde in seinem Betragen! und die Zeit wird alles aufklären.[13]

この後にショーペンハウアーの例が挿入される。当然のことながら、ショーペンハウアー（1788-1860）は、クニッゲより後年の哲学者であり、クニッゲが知る由もない。

例 4　あきらかに鷗外が追加したもの

四十五　儀容

尤も用心すべきは笑ふ容なり。上流の西洋人の笑顔と日本人の笑顔とを較べ視よ、形相を崩さずして笑ふことの決して出来難き事にあらざるを知るに足らん。或は思ふに西洋の学生は舞を習ふとき、先づいかに坐し、いかに立ち、いかに行き、いかに揖するかを教へらる。陸軍幼年学校猶舞の師あり。日本にては諸礼は女子の専有となりぬ。是等も儀容の整はざる一因ならんか。

Dabey soll man sein Aeusseres studieren, sein Gesicht in seiner Gewalt haben, nicht grimarcieren, und wenn wir wissen, daß gewisse Minen, zum Beyspiel beym Lachen, unsrer Bildung ein Widerwärtiges Ansehen geben, diese zu vermeiden suchen. Der Anstand und die Gebehrdensprache sollen edel seyn; Man soll nicht bey unbedeutenden, affectlosen Unterredungen, wie Personen aus nidrigsten Volksclasse, mit Kopf, Armen und andern Gliedern herum fahren und um sich schlagen; man soll den Leuten gerade,

aber bescheiden und sanft in's Gesicht sehn, sie nicht bey Ermeln, Knöpfen und dergleichen zupfen.[14]

百三十七　恋愛

恋愛の事豈説き易からんや。その説き易からざるは、我国と西洋と全くその俗を殊にしたればなり。我俗は相識らずして相婚す。（…）西洋の俗は相識りて択み、相択みと挑み、諾すれば婚成り、諾せざれば婚破る。[15]

百八十二　千金隣を買ふ

千金屋を買ひ、千金隣を買ふとは、古の東洋の俗の厚かりしなり。同屋殊房にして、互に名を相知らざるをもて、上流の風尚となすものは、今の西洋大都皆然り。

Es ist sehr süß, sowohl in der Stadt als auf dem Lande, wenn man mit lieben, wackern Nachbarn eines zwanglosen, freundschaftlichen und vertraulichen Umgangs pflegen darf.[16]

『知恵袋』からは、洋の東西を問わず、鷗外が史実に対してじつに幅広い教養をもっていたことがうかがい知れる。のちに「阿部一族」など歴史小説、『澀江抽斎』などの伝記を執筆する作家・鷗外を面目躍如というべきだろう。しかし、豊富なエピソードを引用したり、日本人向きに書き改めることによって、一方でクニッゲの原著がもっていた啓蒙主義の精神が薄められていることも間違いない。

むすび

クニッゲの『人との付き合い方』のポケットブックに添えられたドイツのジャーナリスト、ウルリヒ・ヴィケルトが指摘するように[17]、クニッゲの本には、カントに見られるがごとき普遍的な倫理が記されているわけではない。むしろその場の状況に応じて実利的 pragmatisch にふるまうことが要請されている。高尚な「真理」を振りかざすのではなく、臨機応変に行動する術を重視したクニッゲ。鷗外の『知恵袋』では、鷗外がこの本を手にした時にドイツで扱われていたような教則本の面持ちが前景化している。鷗外が縦横無尽に引用する故事が、その傾向を助長している。

そもそもなにゆえ鷗外がクニッゲの大部な箴言集の翻訳を思い立ったのかについては、先行研究においても突き止められておらず、新資料が発見されない限り究明はむずかしいと思われる。鷗外が軍医として軍医総監まで出世したことは周知の事実であるが、つねに順風満帆だったわけではない。この『知恵袋』、『心頭語』は、鷗外が不遇の時期に書かれたものである。その恨みと、本書が関係しているのかについても、先行研究でも指摘はされているものの、推測の域を出ず、あくまで確かなことは言えない。

いずれにせよ、『知恵袋』はクニッゲの原著『人との付き合い方』との比較において読むより、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「佐橋甚五郎」「護持院原の敵討」から始まる歴史小説に貫かれている東洋の倫理意識を確認するために紐解かれるべき書物であるように筆者には

思われる。

註

本稿は、2023 年 5 月 13 日に明治学院大学で開催された国際シンポジウム「アフォリズムと通念－日仏独文学をめぐって Aphorisme et doxa dans les littératures de langues japonaise, française et allemande」の口頭発表の原稿に大幅に加筆したものである。なお、参考文献の収集にあたっては、国際学部の澤西祐典先生の助言を得た。記して感謝します。

(1) 小堀桂一郎訳・解説『森鴎外の『知恵袋』』講談社学術文庫、1980 年。
(2) Adolph Freiherr Knigge. Werke in 4 Bänden. Band 2. Ueber den Umgang mit Menschen. Hrsg. von Michael Rüppel. Wallstein Verlag, Göttingen, 2010.
(3) 水内透、ローザ・ヴナーの研究にくわしい。水内透「鷗外研究　アードルフ・フォン・クニッゲ－森鷗外の『知恵袋』との関連において　Ⅰ & Ⅱ」(『山陰地域研究（伝統文化)』第 11 号、1995 年 3 月、同第 12 号、1996 年 3 月)、ローザ・ヴナー（森ゆりこ訳）「『知恵袋』研究－クニッゲ『交際法』の鷗外による受容について」森鷗外記念会編『鷗外』第 66 号、2000 年）
(4) Knigge, S.47.
(5) Knigge, S.33f.
(6) Knigge, S.99.
(7) 鷗外の『知恵袋』には出典は示されていないが、小堀が『後漢書』からの逸話である旨、文庫本で記している。
(8) Knigge, S.58.
(9) Knigge, S.70.
(10) Knigge, S.70f.
(11) Knigge, S.104.
(12) Knigge, S.179.
(13) Knigge, S.261.
(14) Knigge, S.64.
(15) 鷗外の記述から予想されるとおり、該当する文面はない。
(16) Knigge, S.244.
(17) Wickert, Ulrich: Über den Umgang mit Knigge. In: Adolph Freiherr von Knigge: Über den Umgang mit Menschen. Piper Verlag, München, 2004. S.8.

語源でみる接尾辞の語彙化

姫　田　慎　也

▶キーワード

語源、*OED*、語彙化、
短縮語、転換

▼要　旨

接辞の中には、語に付与して派生語を形成するだけでなく、接辞そのものが語彙化し、接辞自体が語となる例が存在する。接辞の語彙化には語形短縮によるものと転換によるものがある。本稿では語源別に、アングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の３つに接尾辞を分け、それぞれの特徴について分析した。

アングロ・サクソン語系では、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある８項目中、-hood/ hood のみが語形短縮によるものであり、他の項目においては、-like/ like, -long/ long, -way/ way, -wise/ wise, -worthy/ worthy の５項目が接尾辞の語彙化ではなく、語から接尾辞への転換があった。-ful/ full と -some/ some については、接尾辞と語の初出年が同時代であるため、接尾辞、語のどちらからの転換であるが不明確であった。

ギリシャ語系では、６項目中、-gram/ gram, -meter/ meter, -phone/ phone, -scope/ scope の４項目が語形短縮によるものであり、転換による語彙化ついては、-ism/ ism と -sphere/ sphere が確認できた。

ラテン語系では、３項目中、-ade/ ade のみが語形短縮によるもので、転換については -logical/ logical と -style/ style が確認できた。接尾辞 -logical は、形容詞 logical よりも初出年が古いため接尾辞から語への転換である。接尾辞 -style は、名詞 style の方が初出年が古いため、語から接尾辞への転換である。

1. はじめに

西川（2013）によると、英語の接頭辞（prefix）は約 155 種類、接尾辞（suffix）は約 133 種類、合計約 288 種類存在する。接頭辞は主に基体（base）に付与することによって基体の意味を変化させ（例：kind⇔unkind, possible⇔impossible）、接尾辞は主に基体に付与することによって基体の品詞を変化させた派生語（例：形容詞 kind⇒名詞 kindness、名詞 atom⇒形容

詞 atomic）を形成する[1]。

接辞の中には、語に付与して派生語を形成するだけでなく、接辞そのものが語彙化して語として存在する例（接頭辞 ultra-⇒形容詞 ultra、接尾辞-ist⇒名詞 ist）が確認できる。姫田（2022）では接辞の語彙化について、接辞が付与した派生語が省略され語形短縮（clipping）するパタン[2]、接頭辞そのものが語に転換（conversion）するパタン[3]、派生語の語形短縮と接辞の転換の両方がみられるパタンの３パタンが述べられている。

派生語から語形短縮した例として、竝木（2009: 25）は（1）をあげている。（1）の ex は接頭辞 ex- が基体である husband に付与した派生語 ex-husband を語形短縮したもので，基体である husband 全てが省略されている。

（1）　He is my ex.（彼は私の元夫です。）　（竝木 2009: 25）

接辞の転換として竝木（2009: 25）は（2）をあげている。（2）では接頭辞 retro- が転換し、形容詞 retro として用いられている。転換時に他の接辞等の付与がなく、そのままの形で接頭辞が形容詞として用いられている。

（2）　This chair is very retro.（この椅子はとても懐古趣味的だ。）　（竝木 2009: 25）

姫田（2022: 40-46）では、語形短縮と転換の両方が見られる例をあげている。（3a）の mini は接頭辞 mini- が付与した派生語 miniskirt が語形短縮し、名詞 mini として用いられている。（3b）の mini は接頭辞 mini- が転換し、名詞 mini として用いられている。

（3）　a.　One after another, Arab states are banning the mini.
（OED, *mini* = miniskirt, n.2）
b.　The new-size Rainbow Chips Deluxe cookie and other minis.　（OED, *mini*, n.4）

本稿では、語形短縮及び転換によって語として用いられる接尾辞について、語源別にグループ分けし、調査することを目的とする。接尾辞を調査するにあたり、辞書によっては接尾辞ではなく連結辞と記載する例が複数存在するため、2. では接辞と連結辞の違いについて述べ、それぞれの辞書が実際にどのように記載しているのかを調べる。それぞれの項目をアングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の３つのグループに分け[4]、接尾辞と連結辞のそれぞれの辞書における記載について分析する。語源別に、アングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の３つのグループに分け、3. では語源別にみた語形短縮による語彙化について、4. では語源別にみた転換による語彙化について考察する。5. では、クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞との違いの観点から、本稿で扱う接尾辞の語彙化との関係性について考察する。

2. 接辞と連結辞

2.1. 接辞と連結詞の違い

西川（2013: 16）は接辞及び連結辞について、ともに語としては用いられず、基体に付与することで機能を果し、意味的な指示内容としては接辞が比較的希薄である一方、連結詞は固有の指示的な意味をもつ語に近いものであると述べている。

辞書の多くが接辞と連結詞とに分けて記載しているが、LDCE の場合、表 1-3 で記載のあるすべての項目を接尾辞としている。LDCE では接辞について、“a group of letters added to the beginning or end of a word to change its meaning or use, such as ‘un-’, ‘mis-’, ‘-ness’, or ‘-ly’” と述べており、接辞が語よりも小さな単位であるといえる。

また、LDCE では連結辞について、“a word that is combined with another word or another combining form to make a new word, for example ‘Anglo’, meaning ‘English’, in the word ‘Anglo- American’” と述べており、連結辞が接辞よりも語に近い単位であるといえる。なお、LDCE で連結辞についての説明文にあった Anglo- を同じ LDCE で引くと連結辞ではなく接頭辞と記載している。

2.2. 辞書による記載の違い

本節では、語として用いられる接尾辞をアングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の 3 グループに分け、*Oxford English Dictionary Online*［OED］, *Oxford Dictionary of English*［ODE］, *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*［OALD）, *Longman Dictionary of Contemporary English*［LDCE］, *Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary*［CCALD］, *Random House Unabridged Dictionary*［RHUD］, *Webster's New World Dictionary of American English*［WEB］を参照し、各項目が接尾辞、連結辞のどちらで記載しているのかについて調査する。

2.2.1. アングロ・サクソン語系

表 1 は語としても用いられるアングロ・サクソン語系の語尾について、7 つの辞書における記載をまとめたものである。接尾辞、連結辞、記載なしの 3 つに分類した。

表 1　アングロ・サクソン語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-bound	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	CF	CF
-boy	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-craft	N/A	N/A	N/A	suf.	N/A	N/A	CF
-free	N/A	CF	N/A	suf.	CF	N/A	CF
-ful	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.
-hood	suf.	suf.	suf.	suf.	N/A	suf.	suf.
-like	suf.	CF	CF	suf.	CF	suf.	suf.
-long	suf.	CF	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-man	N/A	CF	N/A	N/A	CF	CF	CF
-minded	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	N/A	N/A
-side	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-some	suf.	suf.	suf.	suf.	N/A	suf.	suf.
-son	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-way(s)	CF	suf.	suf.	N/A	CF	suf.	CF
-wise	CF	suf.	suf.	suf.	CF	suf.	suf.
-worthy	CF	CF	N/A	N/A	CF	CF	CF

（suf.＝接尾辞、CF＝連結辞、N/A＝記載なし）

アングロ・サクソン語系において、すべての辞書で接尾辞とする項目は -ful のみである。項目の記載のない CCALD を除いて、すべての辞書が -hood, -some を接尾辞と記載している。

接尾辞、連結辞の記載が辞書によって分かれる項目が、-craft, -free, -like, -long, -way(s), -wise である。OED では -craft, -free が記載されていない。

接尾辞、連結辞の記載がある辞書すべてで連結辞としているのが、-bound, -man, -worthy である。OED では -bound, -man が記載されていない。

接尾辞、連結辞ともすべての辞書において記載がないのが、-boy, -side, -son である。「少年」を表す -boy を伴う paperboy, schoolboy は「少年」を表すが、cowboy, bellboy は必ずしも「少年」とは限らない。「～に面する地域」を表す -side には riverside, lakeside 等の語が存在する。「子孫・息子」を表す -son は Anderson, Johnson, Wilson 等、姓を表す語として用いられる。

CCALD のみの記載である「～の心・気質を持つ」を表す -minded は open-minded, commercially- minded 等の形容詞を形成する。CCALD 以外の記載がない -minded と、すべての辞書で記載がない -boy, -side, -son は接尾辞や連結詞よりも大きな単位である、語として辞書では扱われると考えられる。

2.2.2. ギリシャ語系

表 2 は語としても用いられるギリシャ語系の語尾について、7 つの辞書における記載をまとめたものである。表 1 と同様、接尾辞、連結辞、記載なしの 3 つに分類した。

表 2　ギリシャ語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-based	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	N/A	CF
-gram	CF	CF	N/A	suf.	CF	CF	CF
-ism	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.
-meter	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF
-phone	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF
-scope	CF	CF	N/A	N/A	N/A	CF	CF
-sphere	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF

（suf.＝接尾辞、CF＝連結辞、N/A＝記載なし）

ギリシャ語系において、すべての辞書で接尾辞とする項目は -ism のみである。記載のある項目すべてを接尾辞とする LDCE を除き、接尾辞、連結辞の記載がある辞書すべてで連結辞とするのが、-based, -gram, -meter, -phone, -scope, -sphere である。なお、OED では -based の記載がない。

2.2.3. ラテン語系

表 3 は語としても用いられるアングロ・サクソン語系の語尾について、7 つの辞書における記載をまとめたものである。ラテン語系語尾についても接尾辞、連結辞、記載なしの 3 つに分類することができる。

表 3　ラテン語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-ade	suf.	suf.	N/A	N/A	N/A	suf.	suf.
-fashion	N/A	CF	N/A	suf.	N/A	N/A	N/A
-general	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-logical	CF	CF	N/A	N/A	N/A	N/A	suf.
-proof	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	CF	CF
-tude	suf.	suf.	N/A	N/A	N/A	suf.	suf.
-style	suf.	suf.	N/A	N/A	CF	CF	N/A

（suf.＝接辞、CF＝連結辞、N/A＝記載なし）

ラテン語系において、接尾辞、連結辞の記載のある辞書すべてで接尾辞とする項目は -ade, -tude である。OED、ODE で連結辞として記載のある -tude は attitude の短縮語であるが、短縮語 tude の記載があるのは ODE、LDCE のみである。OED は連結辞 -tude の記載があるものの、語として tude の記載はない。

接尾辞、連結辞が辞書によって分かれる項目が、-fashion, -logical, -style である。OED では接尾辞（連結辞）-fashion の記載がない。また、-logical はギリシャ語源 -logic にラテン語源 -al が付与したものである。ラテン語系項目に含めた -logical は -ological, -logic, -ology, -logy 等、様々な形と語源が混在するが、本稿においては -logical のみを調査対象とする。

記載のある辞書すべてが連結辞であるのが、-proof のみであるが、OED では記載がない。

すべての辞書で記載がないのが、-general である。「全体を統括する人」を表す -general を伴う語として、governor general（総督），director general（総裁）等が存在するが、-general は接尾辞や連結詞よりも大きな単位である、語として辞書で扱われると考えられる。

以上、接尾辞か連結辞かについては、一部の項目においては傾向がみられたものの、完全一致とはならなかった。本稿では LDCE の記載に基づき、他の辞書で連結辞とする項目においても接尾辞として扱う。

3. 派生語の語形短縮による語彙化

3.1. アングロ・サクソン語系

アングロ・サクソン語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。OED で接尾辞と語の記載がある 8 種類のアングロ・サクソン語系の項目において、1 項目のみが語形短縮であると考えられる。

3.1.1. hood

表 1 では、すべての辞書において、-hood は接尾辞と記載されている。「性質、状態、集団、時期等」を表す接尾辞 -hood（初出年：1599 年）が付与した neighborhood からの短縮語 hood は、OED によると初出年は 1967 年である。派生語 neighborhood の初出年が a1425 であるため、語形短縮するまで、500 年以上費やしている。また、OED では hoodlum（不良、チンピラ）の語形短縮としての hood も記載されているが、接尾辞 -hood とは語源が異なり、人名である Muldoon に由来する。(4) の名詞 hood は派生名詞 neighborhood の短縮語である。

(4) The boys in the ’hood are killing each other. （OED, *hood* = neighborhood, n.3）

3.2 ギリシャ語系

ギリシャ語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。表 2 の中で、OED で接尾辞と語の記載がある 6 種類のギリシャ語系の項目において、4 項目が接尾辞（LDCE 以外の辞書は連結辞と記載）付与による派生語の語形短縮であると考えられる。

3.2.1. gram

OED では、接尾辞 -gram が付与した派生語からの短縮語 gram（初出年：1797 年）は telegram, cablegram の短縮語である。(5) は名詞 gram の使用例であるが、基体が telegram か cablegram かは (5) の文脈のみでは不明である。

(5)　What's a guffin?.. That's she calls you in her latest 'gram.

(OED, *gram* = telegram or cablegram, n.4)

また、名詞 gram は質量の単位である「グラム」の意味でも用いられる。接尾辞 -gram も名詞 gram もギリシャ語源 *gramma* を起源としている[(5)]。名詞 gram の「グラム」の意味での初出年は 1797 年である。

3.2.2. meter

OED では、接尾辞 -meter が付与した派生語からの短縮語 meter（初出年：1797 年）は parking meter, gas meter, taximeter 等の短縮語である。(6) は派生名詞 taximeter の名詞 meter の使用例である。

(6)　The cab driver left the meter running while he waited for us.

(OALD, *meter* = taximeter, n.)

また、meter には長さの単位を表す「メートル」の意味で用いられ、接尾辞 -meter にも同様の意味を持つ。ともにギリシャ語を語源としているが、名詞 meter の「メートル」の意味での初出年は 1336 年である。

3.2.3. phone

OED では、接尾辞 -phone が付与した派生語からの短縮語 phone（初出年：1880 年）は telephone, earphone, headphone の短縮語である。(7) は派生名詞 telephone の名詞 phone の使用例である。

(7)　Over the phone he hears that the computer keys of his interlocutor stop clicking whenever he's not talking.　(OED, *phone* = telephone, n.2)

また、OED では名詞 telephone が動詞 telephone に転換し、さらに動詞 telephone が語形短縮した動詞 phone も記載されている。(8) は他動詞として phone が用いられた例である。

(8)　Was it necessary to phone me?　(OED, *phone* = telephone, v.)

3.2.4. scope

OED では、接尾辞 -scope 付与の派生語からの短縮語 scope（初出年：1605 年）は cystoscope, horoscope, microscope, telescope 等の複数の派生語からの短縮語である。製品の開発とともに名詞 scope の基体となる派生語は今後増えていく可能性が想定される。(9) の名詞 scope は派生名詞 colonoscope（内視鏡）の語形短縮の使用例である。

(9)　We lubricate the scope with mineral oil. If examination is going to include the right

side of the colon, we begin with the longer colonoscope.

（OED, *scope* = colonoscope, n.3）

また、scope は「（研究、活動等の）範囲、領域」、「（活動等の）機会、自由」といった意味の名詞、「～を詳しく調べる」の意味の動詞でも用いられるが、語源はイタリア語系である。

3.3. ラテン語系

ラテン語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。表３の中で、OED で接尾辞と語の記載がある３種類のラテン語系の項目において、１項目のみが語形短縮であると考えられる。

3.3.1. ade

OED では、接尾辞 -ade が付与した派生語からの短縮語 ade（初出年：1861 年）は lemonade, orangeade, cherryade 等の短縮語である。（10）は lemonade 以外の接尾辞 -ade が付与した派生語の名詞 ade 使用例である。短縮語 ade がどの派生語からの語形短縮であるのかは文脈によるといえる。

（10）The delivery of lemonade and all the other ‘ades’.

（OED, *ade* = orangeade, cherryade, gingerade, etc., n.）

なお、CCALD, RHUD, WEB において ade は語として記載されていない。

4. 転換

4.1. 転換による語彙化

接辞から語への転換の場合、接頭辞に関しては（11）のような例がみられる。（11a, b）はギリシャ語系、（11c, d）はラテン語系である。すべての項目において接頭辞の方が語よりも初出年が古く、もともと存在していた接頭辞が語として使用されるようになったものであると考えられる。本稿では（11）の現象について、接辞の転換による語彙化として扱う。

（11）a. 接頭辞 anti-（初出年：1559 年）→ 名詞 anti（初出年：1788 年）
b. 接頭辞 mega-（初出年：1868 年）→ 副詞 mega（初出年：1966 年）
c. 接頭辞 pre-（初出年：1559 年）→ 前置詞 pre（初出年：1960 年）
d. 接頭辞 ultra-（初出年：1551 年）→ 形容詞 ultra（初出年：1793 年）

（11）の接頭辞は様々な基体に付与して多くの派生語をつくる（例：ultraclean, ultrahigh, ultramodern）。しかし、（11）は特定の派生語を語形短縮したものではなく（例：ultraclean≠

ultra, ultrahigh≠ultra, ultramodern≠ultra)、接頭辞が持つ意味を継承し、語として確立したと考えられる（例：接尾辞 -ultra「超、過、極」⇒形容詞 ultra「過激な、極端な」)。

また、接辞の転換による語彙化の中には、一つの品詞に留まらず、多数の品詞を有する例もみられる。例えば、「反対者、反対論者」の意味の名詞 anti、「反対して」の意味の形容詞 anti、「～に反対して」の意味の前置詞 anti は、「反、排、抗、対」の意味をもつ接頭辞 anti- が転換したものであると考えられる。

ただし、接辞と語の両方が存在する項目すべてが接辞の転換による語彙化であるといえない例も存在する。たとえば、アングロ・サクソン語系接頭辞 fore- の初出年は c1000 であるが、副詞 fore は古英語から存在する。この場合、接辞の転換ではなく、語の転換によるものであると考えられる。

接尾辞についてどのような転換のパタンがみられるのか、3 つの語源別に調べていく。

4.2. アングロ・サクソン語系

表 4 は OED におけるアングロ・サクソン語系の接尾辞と語の初出年をまとめたものである。

表 4　アングロ・サクソン語系の接尾辞と語の初出年

接尾辞	初出年	語	初出年
-ful	OE	adj. n.	eOE
-like	a1450	adj.	OE
-long	OE	adj.1, n.1	eOE
-some	OE	pro.	OE
-way(s)	eOE	n.1	eOE
-wise	OE	n.1	OE
-worthy	early 13th cent.	adj., n., adv.	eOE

(11) では接頭辞が語に転換した例をみたが、アングロ・サクソン語系の表 4 においては、-like/ like, -long/ long, -worthy/ worthy の 3 項目は接尾辞よりも語の方が初出年が古い。また、-wise/ wise, -way(s)/ way の 2 項目についても、接尾辞 -wise と名詞 wise、接尾辞 -way(s) と名詞 way も表 4 では初出が同時期であるが、OED によれば、ともに語の方を語源としている。

接尾辞 -ful と形容詞等の full、接尾辞 -some と形容詞等の some は古英語から存在するものの、それぞれの接尾辞の方が語よりも古くから存在するとはいえず、むしろ、OED においては、接尾辞 -ful は形容詞 full を語源と記載されている。接尾辞 -some においては、'approximately' や 'nearly' の意味においては形容詞 some が語源であると記載されている。ただし、接尾辞 -some は古英語 -sum と sum を語源とし、形容詞等の some は古英語 sum を語源とするため、さらに調べる必要がある。

以上のことからアングロ・サクソン語系においては、今後の調査が必要な接尾辞 -some と形容詞等の some を除いて、接尾辞から語への転換ではなく、語から接尾辞への転換があった

ものであると考えられる。

なお、OED では -ful, -like, -long, -some を接尾辞、-way, -wise, -worthy を連結辞と記載しているが、転換に関しては、接尾辞、連結辞の分別は関係がないといえる。

4.3. ギリシャ語系

ギリシャ語系において、-ism/ ismと -sphere/ sphere の 2 項目が語形短縮ではなく、転換であると考えられる。OED によると接尾辞 -ism はギリシャ語源であり、名詞 ism の初出年は 1680 年である。接尾辞 -sphere もギリシャ語源であり、名詞 sphere の初出年が a1300 である。これらギリシャ語系 2 項目については、接尾辞から語への転換があったと考えられる。

4.4. ラテン語系

ラテン語系接尾辞について、-logical/ logical と -style/ style の 2 項目が語形短縮ではなく、転換であると考えられる。OED によると接尾辞 -logical はギリシャ語源である -logic にラテン語源である -al が組み合わさったものであり、OED での形容詞 logical は初出年が ? a1513 であるため、-logical/ logical に関しては、接尾辞から語への転換があったと考えられる。

しかし、OED によれば接尾辞 -style の初出年が 1934 年であるのに対して、名詞 style の初出年は c1330 であるため、-style/ style に関しては、語から接尾辞への転換があったと考えられる。

5. クラスⅠ接尾辞とクラスⅡ接尾辞

Allen（1978）や Siegel（1974）は、基体に付与することによってアクセントの移動を起こす接辞をクラスⅠ接辞、基体に付与してもアクセントの移動が起こさない接辞をクラスⅡ接辞と分類している[7]。表 1-3 で、半数以上の辞書が接尾辞と記載している項目において、表 1 のすべてのアングロ・サクソン語系接尾辞が基体に付与してもアクセントの移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

（12）a. -ful: cáre ⇒ cáreful
b. -hood: néighbor ⇒ néighborhood
c. -like: snáke ⇒ snákelike
d. -long: héad ⇒ héadlong
e. -some: hánd ⇒ hándsome
f. -way(s): ány ⇒ ányway

ギリシャ語系接尾辞 -ism においても付与する基体のアクセント移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

（13）-ism: pátriot ⇒ pátriotism

ラテン語系接尾辞 -style は付与する基体のアクセント移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

（14）-style: Japanése ⇒ Japanése-style

ここまですべてクラスⅡ接尾辞の例であったが、ラテン語系接尾辞 -ade においては、付与する基体のアクセント移動が起きているため、クラスⅠ接尾辞であると考えられる。

（15）-ade: lémon ⇒ lemonáde

また、ラテン語系接尾辞 -tude に関しては、基体が語よりも小さな単位である形態素 magni- への付与するクラスⅠ接辞の特徴がみられるためクラスⅠ接尾辞であると考えられる[8]。

（16）-tude: magni- ＋ -tude ⇒ magnitude

クラスⅠ接尾辞であると考えられるラテン語系接尾辞 -ade と -tude の語彙化はそれぞれ lemonade, orangeade 等と attitude の語形短縮であり、クラスⅡ接尾辞で語形短縮がみられるのは、アングロ・サクソン語系接尾辞 -hood（neighborhood ⇒ hood）のみであった。接尾辞 -hood 以外の接尾辞はすべてクラスⅡ接尾辞であり、語彙化はすべて転換によるものであると考えられる。

6. 結語

語源別に接尾辞の語彙化についてみてきた。接尾辞の語彙化には大きく分けて、語形短縮によるものと、転換によるものがある。語形短縮による接尾辞の語彙化はギリシャ語系で 4 項目確認できたものの、アングロ・サクソン語系とラテン語系接尾辞においては、それぞれ 1 項目のみであった。

アングロ・サクソン語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある 8 項目中、-hood/ hood の 1 項目のみが語形短縮によるものであった。他の 7 項目においては、-like/ like, -long/ long, -way/ way, -wise/ wise, -worthy/ worthy の 5 項目がそれぞれの初出年から語から接尾辞への転換があったことが分かった。残りの -ful/ full と -some/ some の 2 項目については、接尾辞と語の初出年が同時代であるため、接尾辞から語への転換であるのか、語から接尾辞への転換であるのかについては不明確である。

ギリシャ語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある 6 項目中、-gram/ gram, -meter/ meter, -phone/ phone, -scope/ scope の 4 項目が語形短縮によるものであった。また、それぞれ語形短縮の基体となる派生語が数種類存在することが分かった。接尾辞 -gram と -meter については、語形短縮だけでなく、転換による語彙化も確認できる。これら 4 項目に

ついては、ほとんどすべての辞書が連結辞と記載している。転換による語彙化ついては、ギリシャ語系では -ism/ ism と -sphere/ sphere の 2 項目が確認できたが、いずれも接尾辞よりも語の方が初出年が新しいため、接尾辞から語への転換であると考えられる。また、すべての辞書で -ism を接尾辞と記載し、-sphere についてはほとんどの辞書が連結辞と記載している。

ラテン語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある 3 項目中、-ade/ ade のみが語形短縮によるものであった。転換について、ラテン語系では -logical/ logical と -style/ style の 2 項目が確認できた。接尾辞 -logical については、形容詞 logical よりも初出年が古いため、接尾辞から語への転換であると考えられる。ただし、接尾辞 -style については、名詞 style の方が初出年が古いため、語から接尾辞への転換であると考えられる。記載のあった辞書すべてが -ade を接尾辞と記載し、-logical と -style については、接尾辞、連結辞の記載が辞書によって異なる。

接尾辞か連結辞かの分類については、ギリシャ語系項目で連結辞とする辞書が多いものの、一部の項目以外、すべての辞書が接尾辞か連結辞で一致することは少なかった。また、辞書における接尾辞、連結辞の記載の違いと、語形短縮、転換の語彙化とについての関係性はみられなかった。

クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞に関して、ラテン語系接尾辞 -ade と -tude にクラスⅠ接尾辞の特徴がみられたが、他の接尾辞は語源に関係なく、クラスⅡ接尾辞であった。今回の調査では語彙化する接尾辞の多くがクラスⅡ接尾辞であったが、調査対象が少なかったため、さらに多くの調査対象を見つけて考察したい。

接辞の語彙化の例については、接尾辞よりも接頭辞の語彙化のパタンが多く存在する[(9)]。接頭辞についても語源別に語形短縮と転換による語彙化の調査をすることを今後の課題としたい。

注

(1) 竝木（1985）は現在でも使われている接辞は、接頭辞が 70 以上、接尾辞は約 90 と述べている。Kodani（2000: 40-42）は接頭辞の特徴として、多くが付与した基体の意味を変化させた派生語を形成すると述べている。竝木（1985: 115）によると、品詞を変える接頭辞は、a-, be-, de-, dis-, en-, out-, un- の 7 つのみである。また、竝木（2009: 20）によると、接尾辞は原則的に付与する基体の品詞を変える。

(2) Bauer（1983）は、mathematics が math、telephone が phone のように語が短く略されることを ‘clipping’ と呼んでいる。竝木（2009）においては clipping のことを「語形短縮」と呼んでいる。また、clipping された語のことを竝木（1985）、島村（1990）では「短縮語」、大石（1988）では「略語」と呼んでいる。

(3) 接辞付与がなく品詞が形容詞から動詞、動詞から名詞、名詞から形容詞などに変わる過程について、転換（conversion）、ゼロ派生（zero-derivation）、機能推移（functional shift）等がある。その違いについては米倉（2015: 54-81）が詳しい。本稿では接辞の語彙化については転換（conversion）とする Huddleston and Pullum（2002: 1640）に従う。

(4) 西川（2013）を参考に本稿でも接辞をアングル・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の 3 つのグループに分けて考察する。

(5) 本稿では接辞が語として使用されることを語彙化と呼んでいるが、用語としての語彙化を意味の変化や発音の変化について表す場合に用いられることもある。Bauer（2001: 43-47）においては、例えば、意味の変化として、run time は本来の「競争のスタート時間」の意味から変化し、コンピューター用語として「実行時間；実行時」の意味で用いられ、また、発音の変化として、例えば、waistcoat の発音

［wéistcòut］が変化し、［w ɛ́ skət］の発音になると述べている。

(6) 本稿ではギリシャ語系に関してはギリシャ文字表記ではなく英語アルファベットに変換した ODE の記載に基づいている。

(7) クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞の特徴と分け方は主にアクセントの移動であるが、アクセント移動がクラス分けの絶対条件ではなく、その他複数の条件も存在する。クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞の特徴については、大石（1988）が詳しい。

(8) クラスⅠ接辞の特徴のひとつとして、語よりも小さな単位への付与がみられる。たとえば、クラスⅠ接尾辞 -ity は形容詞 capable に付与し、派生語 capability をつくることができる。また接尾辞 -ity は語よりも小さな単位である接頭辞（連結辞）calam- に付与し派生語 calamity をつくることもできる。

(9) 筆者が行った調査では、接頭辞の語彙化は 40 例以上の存在が確認できた。

辞書

Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary（2018）9th ed. Glasgow: HarperCollins Publishers.［CCAD］

Longman Dictionary of Contemporary English（2014）6th ed. Harlow: Pearson Education Limited.［LDCE］

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English（2020）10th ed. Oxford: Oxford University Press.［OALD］

Oxford Dictionary of English（2010）3rd ed. Oxford: Oxford University Press.［ODE］

Oxford English Dictionary Online.（2000-present）Oxford: Oxford University Press. Retrieved Apr. 10, 2023. from https://www.oed.com/［OED］

Random House Unabridged Dictionary（1993）2nd ed. New York: Random House.［RHUD］

Webster's New World Dictionary of American English（1991）3rd College ed., rev. & updated. New York: Prentice Hall.［WEB］

『ジーニアス英和大辞典』（2001）東京：大修館書店.

『新英和大辞典』（2002）第 6 版. 東京：研究社.

『リーダーズ英和辞典』（2012）第 3 版. 東京：研究社.

参照文献

Allen, Margaret（1978）*Morphological Investigation*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

Bauer, Laurie（1983）*English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, Laurie（2001）*Morphological Productivity*. Cambridge: Cambridge University Press.

姫田慎也（2022）「接辞の語彙化」『日本英語英文学』32: 25-49.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kodani, Shinichiro（2000）*English Words: Word-Formation & Evaluable Words*. Kyoto: Ryukoku Gakkai.

竝木崇康（1985）『語形成』（新英文法選書 2）東京：大修館書店.

竝木崇康（2009）『単語の構造の秘密：日英語の造語法を探る』（言語・文化選書 14）東京：開拓社.

西川盛雄（2013）『英語接辞の魅力：語彙力を高める単語のメカニズム』（言語・文化選書 39）東京：開拓社.

西川盛雄（2021）『接辞から見た英語：語彙力向上をめざして』（ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ 3）東京：ひつじ書房.

大石強（1988）『形態論』（現代の英語学シリーズ 4）東京：開拓社.

島村礼子（1990）『英語の語形成とその生産性』東京：リーベル出版.

Siegel, Dorothy（1974）*Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT.

米倉綽（2015）『歴史的にみた英語の語形成』（言語・文化選書 54）東京：開拓社.

執筆者紹介

角岡賢一	本学経営学部教授（英語）
Simon ROSATI	本学経済学部教授（英語）
國重裕	本学経営学部教授（ドイツ語）
Sean A. WHITE	本学経営学部准教授（英語コミュニケーション）
姫田慎也	本学短期大学部准教授（英語）

編　集　後　記

おかげさまで、『龍谷紀要』第45巻第1号を発刊することができました。貴重な論考をご投稿いただきました先生方、またご閲読いただいた先生方には、紙上を借りて心より御礼申し上げます。本号に掲載された5篇の論文は、英語分野、初修外国語分野、および教養教育分野より、各研究成果をご投稿下さったものです。ぜひ多くの先生方にご味読いただきたいと思います。

さて、かつて河合隼雄が新幹線に乗るために駅の窓口に行ったところ、駅員から「のぞみはありませんが、ひかりならあります」と告げられ、河合はその言葉の響きにいたく感動したといいます。私たちは3年前、新型コロナウィルスの登場と感染拡大により、教育や実習、学会活動等において、大変難しい対応と変革を迫られました。私自身、オンライン授業の開始時には、学生の顔や反応が見えない状態で講義をすることの難しさを感じ、「いつまでこれが続くのだろうか」と先行きへの「のぞみ」を失いかけていました。しかし、オンライン授業についての教員間での情報交換等の助け合い、事務職員の方のサポート、そして何より学生の理解と協力によってコロナ禍での授業運営を乗り切ることができました。今思えば、教職員や学生の一致団結こそ、コロナ禍の闇に差し込んだ「ひかり」であったと思います。

コロナ禍の混乱期においても、『龍谷紀要』は着実に発刊を重ねさせていただきました。今後とも『龍谷紀要』にご高配を賜りますよう、お願い申し上げます。

（能美潤史）

編集委員

能美潤史　國重　裕　新井　潤
藤原崇人　久保和之　嶋林昭治

2023年10月13日　印　刷
2023年10月20日　発　行

龍谷紀要第45巻　第1号

編　集　龍谷大学
龍谷紀要編集委員会

発　行　龍谷大学
京都市伏見区深草塚本町67
電　話　(075) 642－1111

印刷所　協和印刷株式会社